

都留文科大学報

第127号

2015年
3月10日(火)

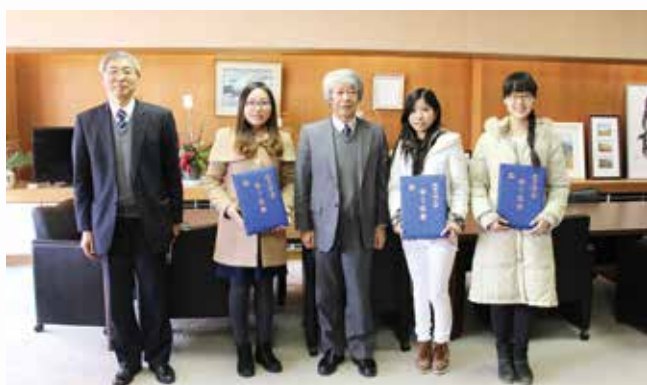
編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内

☎ 0554-43-4341 URL: <http://www.tsuru.ac.jp/>



山梨県との包括連携協定 調印式 (平成26年12月3日)



中国・湖南師範大学 交換留学生 帰国前あいさつ



文大名画座『幸せの太鼓を響かせて～ INCLUSION ～』開催



海外教育事情研修に出発

特集 さよなら「文大」..... 2

初等教育学科 高田理孝 教授
初等教育学科 相守光恵 教授
国文学科 牛山 恵 教授
英文学科 西出公之 教授
比較文化学科 鳥居明雄 教授

おくることば 7

初等教育学科 西本勝美 教授
国文学科 長瀬由美 准教授
英文学科 大平栄子 教授
Hamish Gillies 准教授
社会学科 渡辺豊博 教授
比較文化学科 伊香俊哉 教授
大学院 鶴田清司 教授

旅立つことば 12

初等教育学科 加養孝善
国文学科 市村志帆
英文学科 淀川 剛/木下友華
社会学科 田中優衣/桑木晃太郎
比較文化学科 小林紗弥
文学専攻科 水野健吾
大学院 国文学専攻 柄澤尚美
地域社会研究専攻 王維穎
英語英米文学専攻 三沢奈央
比較文化専攻 篠原双葉

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 20

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科 (現代社会専攻/環境・コミュニティ創造専攻)
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより 35

国文学科
社会学科
比較文化学科
比較文化学科
ジェンダー研究プログラム
平成 26 年度司書・司書教諭課程特別講演

文大だより 41

台湾スタディーツアー報告
卒業演奏会を終えて
卒業制作展を終えて
白熱教室
文大名画座
地域貢献活動
フィールドノート通信(フィールド)・サテライト
本 ぶんだい堂
祝・都留文科大学創立 60 周年
編集後記...鳥原正敏..... 46

さよなら文大

退職教員からの言葉

都留文科大学での36年間

初等教育学科教授 高田理孝



本学には1979年に着任、今日まで36年の歳月が経過しました。教育・研究・学務の3側面からこの間を振り返ると、教育面では、着任早々405教室が満員になるような授業を任され、徹夜で作成した講義ノートを持ち教室に向かう階段を上るときの緊張感と胸の鼓動を今でも印象深く思い出します。幸い、ゼミ等で素晴らしい学生達に恵まれ、人間力養成をモットーにした夏のテニス合宿・冬のスキー合宿等続け、特にスキー合宿では非日常的な体験を通して学生諸君が成長・変化する様子を目の当たりにし、自分にとっても極めて貴重な経験であったと思っています。卒業後それぞれの人生を着実に歩むOB・OGの存在は私の教員生活における最高の財産です。

研究においては、自分のその時々に関心でテーマは変わってきました。20代前半の認知心理学との出会いから、当時花形であった記憶の中でもコントロール・プロセスである体制化に興味を持ち、30代まで様々な可能性について検討を繰り返しました。40代になるとさらに、体制化を含むスキーマに注目するようになり、特に英語教育との関係に関心を持ちまし

た。50代以降は、個人の過去経験の集積・再構成である自伝的記憶が研究テーマになっています。

学務についてですが、40代も末になって、入試関係諸委員会の長を歴任、データ分析をもとに入試改革を行い、大学教員による高校訪問も開始しました。また、本学の法人化後、副学長職に就き、教授会議長を任されました。初回の教授会では、405教室での授業のように緊張していたことが忘れられません。法人化の翌年、今谷元学長辞任を受け、加藤前学長就任までの短い間でしたが、学長代行をつとめたこともありました。副学長時代、加藤前学長からは学務以外にも多くのことを学び、それは私にとって人生の宝ともいえるものになっています。

法人化をめぐる様々な見解が存在するでしょうが、法人化の重要な要素の一つは教授会の上部に意志決定機関としての教育研究審議会を設けたことだと思ひ

ます。当時機能的固着に陥りつつあるように見えた本学にとって、迅速な意志決定を可能にする法人化は必要な改革であったと現在でも考えています。しかし、システムはその運営に関わる人材によって、適切に機能するか否かが大きく左右されるのも事実です。最適な人材配置により、教育研究審議会が本来期待された役割を果たすことができるか否か、そこに本学の法人化に対する評価がかかっているといっても過言ではないでしょう。

最後に、あらゆる意味で、都留文科大学は私にとり人生の大きな学びの場でありました。学びを可能にした諸先輩・同輩・これからの都留文科大学を担うであろう方々に、心からの感謝を捧げたいと思います。



Deep Powder を楽しむ、八甲田山にて(2013)

さよなら文大

退職教員からの言葉

30 年をふりかえって

初等教育学科教授 梶守光恵



今年、創立 60 周年という歴史の中で、30 年間、大学運営、教育、学生指導に携わる人生を贈ることができ、感謝の思いで一杯です。着任し、初めての緊張の中での教授会、上田薫学長から現在の福田学長まで、7 代の学長のもと、何故か、半分以上の年月を入試関係の委員会です仕事をしてきました。昔は、高校訪問をすることもなく、入試採点に 3～4 日かかっていたこともありましたが、いつの頃からか、前期には、20～30 校近い高校訪問、後期には入試業務に追われるというサイクルになり、新聞の入試情報、先生方の体調、はては、各地の天候に注意するといった生活をするようになりました。歴代の委員長のもと、チームプレーをする中で暖かい人間関係も築くことができました。

今、子供の数が減り教育システムが変り、受験方法も変化していく中で、どう優秀な学生を集め、教育し、社会に送り出していくか、大変な時代になっています。私も、自分の立場で、大学発展のために微力ですが貢献していきたいと考えています。

この 30 年、本当に多くの学生たちと出会い、音楽を通して熱く濃密な心の交流ができました。それぞれの学生が、この若さで重い課題を背負いながら、必死で学び、音楽と向きあっている姿に涙しながら、どう支えたらよいか模索する日々でもありましたが、彼らの生きる力から多くを学ばせていただきました。大勢の中でもまれていく中にしか人間は大きくなれないと、彼らの姿を見ていて実感しました。多くの卒業生が、日本中、各地で、第一線に立っている姿に接するたびに、彼らの原点が都留文科大学で過した中にあることを教えられます。一人で見知らぬ都留に根を張り、学問をし、生涯の友情を育んでこられたことを、彼ら

は口々によかったと語ってくれます。彼らと共に生きられたことを、そして、彼らの強さを誇りに思っています。

30 年前、新築の音楽棟に着任できたこと、そして昨年には新品のピアノを 19 台も買っていただいたこと、感謝しています。幸せで楽しい都留人生でした。大変お世話になりました。都留文科大学のさらなる発展を祈っています。



卒業演奏会にて

さよなら文大

退職教員からの言葉

第二の故郷、都留

国文学科教授 牛山 恵



私は、東京で生まれ横浜で育ち、今は東京で暮らしています。東京も横浜も私にとっての故郷ですが、都留文科大学に21年間通ううちに、今では山梨が、とても懐かしく安心するところになりました。

もともと、大学受験で都留文科大学を目指したこともあって、都留文科大学の教師になることが決まったときは、たいへん喜びました。憧れの大学で、教員養成という自分の目標の実現に携わることができるのです。いただいた機会を精一杯生かそうと思いました。

自宅から2時間以上かかる道のりで、よく「たいへんですね」と言われますが、苦になったことはありません。「四季それぞれの景色が楽しめますし、なにより好きな本が読めます」とこたえています。本当にその通りで、つい最近『鹿の王 全二巻』（上橋菜穂子）、『ソロモンの偽証 全六巻』（宮部みゆき）を読みました。『シュルレアリスムとは何か』（巖谷國士）も面白い本でした。村上春樹を読破したのも中央線の中です。電車の中は、専門書を読むのには向いていないようで、もっぱら小説に手が出ます。

都留文科大学にいたおかげで、山梨の先生方との交流ができたことは、大きな収穫でした。山梨国語研究会の先生方は、すばらしい単元学習を展開しており、その発想や教育の方法には学ぶことがたくさんあります。研究会に参加するたびに、山梨の国語教育はレベルが高いと思うことばかりです。教え子も、何人も山梨の現場で教壇に立っています。先輩に学んで、信頼される教師に育ってほしいと願っています。

来年度も非常勤で都留文科大学に来る予定ですので、「さよなら『文大』」という気持ちにはなれませんが、定年という節目を迎えますので、都留文科大学について思うことを記しておきます。

文大坂の四季は、強く心に残っています。去年は、銀杏の実がたくさん落ちていました。落ち葉をかさかさ音をさせて歩くのも、若葉を見上げながら歩くのも、すばらしいひとときです（近頃、登りは少し息があがりますが）。地震が来ると、本部棟五階の

研究室はかなり揺れて、本も落ちます。いつも、大丈夫かなと不安になります。廊下やトイレがいつもぴかぴかです。清掃の方々に感謝の心で一杯です。岩殿山に登り、猿橋に行ったことが自慢です。コンパは、最近は「らくしゅう」ばかりですが、駅に近くて便利です。

都留は私の第二の故郷です。これからもますます発展することを心から祈っています。



2014年 夏合宿（清里 伊与ロッジにて）

さよなら文大

退職教員からの言葉

予習のすすめ

英文学科教授 西出公之



生涯にわたって学び続ける力や主体的に考える力を持った人材を育成するために、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し、答を見い出していくような能動的学修への転換が必要であるというようなことを、中教審は言っているらしい。そのためかどうかはわからないが、「調べ学習」、「質問学習」、「協働学習」、「プロジェクト学習」、「グループワーク」、「ピアワーク」、「反転授業」などなどという言葉がよく聞かれる。先日、LTDという言葉を知ったので調べてみたら、Learning Through Discussionのことであった。

能動的学習あるいは能動的学修の最たるものは、「予習」ではなかろうか。まだ習っていないことに向かって自分の意志で挑戦するのであるから、労力が要る。そもそも「授業」とは、学習者から見れば「授けられる業」なわけで、受動的であるのは否めない。

「反転授業 (flipped classroom)」という言葉を知ったときは、一体何を反転するのかといふかったが、従来の授業と宿題の役割を反転させた授業で、デジタル教材などを利用して自宅で知識を習得し、教室では知識の確認や問題の演習などを行うのだという。最初は、授業の前にタブレットの動画で自習するという意味では「予習」なのかとも思ったが、クリックすれば授業の動画が始まるという

うのではやはり受身的である。従来の授業とは違うのは、学習者が動画を途中で止めたり、何度でも繰り返したりできるというところだけのようである。昔、予備校で講師をしていたとき、同じ授業を1時限と2時限で繰り返していたことがあった。あるとき、一人の受講生から「先生の同じ授業に2回出て良いですか」と聞かれた。そんなに私の授業が面白いのかと思ったとたん、「1時限目は予習のつもりです」と言われた。しかし、同じ授業を二つ聞いても、最初の授業が予習にはなることはない。後の復習にはなるだろうけれど。

前任大学の三重大でドイツ語教員から聞いた話である。ある旧制高等学校で、未習外国語の「独語」の初日に教員が「定冠詞のderを曲げてごらん」と言ったそうである。生徒がポカンとしていると、「できないのか。どうにもならん。」と言って、先生、帰ってしまった。次の日も「derを曲げてごらん」。やはりポカンとしていると帰ってしまう。こんなことが何回か続いた。さすがに生徒の方は心配になり、寮の先輩に聞いてみた。先輩は「der, des, dem, den, … のことだ。これを覚えて行って、言ってみな」と、教えてくれた。次の授業で覚えたことを言うと、先生「なんだ、できるじゃないか。では次は〇〇〇をやってみな。」生徒は困ってまた先輩に聞く。しかし、先輩も何度も聞かれると面倒になって、

「△△△という本に出ているから、それで勉強せい」。何のことは無い、すべて自学自習である。教授法もへったくれもない。しかし、覚えなければならぬことは覚えたわけで、初級文法がマスターされた。外国語を独習する能力も付いたはずだ。

授業に出ていれば単位が稼げるというのを「出稼ぎ科目」というのだそうだ。Brian McVeigh という人が Japanese Higher Education as Myth (2002) という衝撃的な本で、日本のある大学で出席を取らなかったら、受講生の一人から「出席!」と大きな声が上がってびっくりしたことを書いている。単に出席していても、聞いていなければ無意味、さらには聞いたことが分かっていなければ意味がない。真面目に板書されたことを写しても、自分のものにはならないだろう。やはり予習をして、少なくとも分かるところと分からないところぐらいの区別はして授業に臨みたい。予習をすることによって、授業中に吸収できることを最大にしようとすべきだろう。

では、どのように予習すれば良いのかと言われてしまいそうであるが、これは別に心配しなくて良い。まずは、ただ予習してみるというか、自分勝手にやってみることである。やってみれば、おのずと自分のスタイルができあがるはずである。本居宣長も、学び方は、さまざまであり、学ぶ人の心まかせにして良いと言っている。

さよなら文大

退職教員からの言葉

出会い・別れ・ことば

比較文化学科教授 鳥居明雄



昭和55年の着任以来30数年、学内外でのじつにさまざまな出会いと別れの積み重なりとして今に至っている。それにつけても想起されるのはつぎのようなことである。

股旅物の創始者であり、畢生の戯曲『瞼の母』の作者でもある長谷川伸が、幼少期3歳のときに別離した生母三谷かうとの47年ぶりの再会を果たしたのは、昭和8年のことであった。その当時、小学校も卒業できずに自学自勉の刻苦を通した長谷川伸は国民的大衆作家として名実備わり、一方の生母は再婚先である三谷家で社会的にも輝かしい家系を築き上げていた。社会的な事件にもなったこの再会劇は、仲介者の松本恵子氏からもたらされたつぎのような書状がその発端であった。

「瞼の母」を語っていらっしゃる貴郎に御母様が幾十年間、長谷川家に残してこられた貴郎方御兄弟の事を、夢に見、幻に見つづけていらしたお心を、是非御伝えしなければならぬと存じ、突然ながらペンを執りました。御母上様は今年72歳の御高齢で、三谷家の長男隆正氏の許に、御幸福にお過しになっておられますが、「瞼の子」故に、年老いたお心を、どんなに悲しいものにされていらっしゃる

る事でしょう。「私があの家を出る時に、頑是ない伸は、僕が今に大きくなって、軍人になって、お馬に乗ってお迎いに行つてあげるからね、お母さん、泣くんじゃないのよ」といったあの声が、未だに耳に残っています。あの小さな子供は今何処にいるんでしょう、ほんとうに、たった一目でいいから会いたいと思いますよ」。これは貴郎の御母様が洩らされた御述懐でした。或る日、御母上様の為に、お馬に乗った軍人さんになってあげて下さいますように、お願い申し上げます。

この書状を手にした長谷川伸はつぎのような述懐を残している。

円タクを呼んで貰つて駅へ急がせた私の懷ろに、女文字の手紙はあつた。環状線道路をスウスウと駛る車の行くこの道、連なる家並が、私の眼に、何度かぼつと霞んだ。涙がとめ度もなく湧いて出てくるのだつた。汽車に乗つて後も、熱海に下り立つて車に乗つてからも、いつもの如き一人客の客室にあつても、相客を避けて入る湯の中でも、涙は視力を幾度か潤ませた。夜に入りて雨となつた。(母に会えそうだが) だれかにそう云つてみたい、宿の女中さんでもいいから、そう話して

みたい、そんな衝動が口の端にうずうずしてきた。が、休えた、心安くしている女将にすら、気振りもみせず、寝苦しい二夜を過し、紀元節の宵に我が家へ歸つた。

これら三者の述懐の内容もさることながら、三者三様の、その日本語、その述懐ぶりの品性に強く胸撃たれる。「お馬に乗つて」と今もつぶやく生母のことばの息遣い、書簡文の気高さ、長谷川伸の語り口。いずれも文字を前提にしてはいない語り口調、述懐のことばのもつ品性と真摯が、格別に胸を撃たずにはおかない。

出会いと別れ、別れと出会い。通有の文字にはけつして成らないその機微と情動は、述懐のことばとしてそのつど生まれ消え去る。まさに、出来事やいのちの営みとともに、そこに寄り添ふことばも、生消をともにする。これをもって、世の人の営みの実相がいかなるものか、一目瞭然というべきだろう。

これまでの永年諸般にわたるおつきあいに、この場をかりて謹んでお礼を申し上げます。

おくることば

自分の「感覚」を
大事に初等教育学科教授
西本勝美

みなさんは「3・11」の直後に入学し、本学で学んだ4年間は「3・11」以後の、被災地の復興の4年間と重なっています。みなさんにとってあの出来事は、特別な意味を持ち続けることになるでしょう。「3・11」は、とりわけ原発に関して多くの問題を私たちに突き付けましたが、ここではあえて、人びとの「感覚」ということについて考えてみたいと思います。

「3・11」以前にも、「専門家」と呼ばれる人たちが「科学的」とされるデータや資料を示して原発の安全性を主張するのに対して、「何と言われようと怖いものは怖い」という「感覚」や、言葉にならない「不安感」を持っていた人びとは、けっして少なくなっただろうと思います。そして、そうした「感覚」から原発推進に消極的・懐疑的だった人びとに対して、「感

覚でものを言うな」という非難が繰り返されてきました。

しかし私は、このような一般の人びとの「感覚」が、とても大事なことだと考えています。

「3・11」が人びとの「感覚」の正しさを証明したというだけでなく、「感覚」に根を持たない「思想」は本物の「思想」ではないと思うからです。

この4年間のうちに、原発には再稼働や新設の場合はもちろんのこと、廃炉とする場合でも、使用済み核燃料の処理という難問があることを多くの人びとが認識し、しかも、この難問はけっして解決されることはないのだという「感覚」が広がりました。これは「世論」ではなく、人間の力や「科学」が及ばないものへの畏敬の念を伴った「感覚」です。「世論」は説得や誘導によって変化することもあります。が、「感覚」は人の身体的・実存的なレベルから発するもので、他者がぬぐい去ることはできません。



卒業にあたってみなさんに期待したいのは、自分の「感覚」（言葉にならないものも含めて）に合わない事柄については判断を保留して、可能な限り多面的に探究し、「感覚」を共有する仲間とともに、自分の頭で考え抜いてほしいということです。常に自分の「感覚」と照らし合わせて熟考されたもののみが、人の生を導き、社会に方向を与える「思想」へと結晶していくのです。



おくることば

大学卒業によせて



国文学科准教授
長瀬由美

『源氏物語』^{をとめ}少女巻。光源氏は息子夕霧の元服にあたり、厳しい教育方針をとって、彼を大学寮に入学させます。無理に学問させることはないと不満顔の祖母大宮に対して、光源氏は言う。一名門の子弟に生まれ、苦勞もせず思いのままの官爵につけば、権勢におもねる世間の人が、内心では鼻であしらいながらも、追従してくるものです。それで自ずとひとかどの人物らしくもみえましようが、そんな栄華は、時勢が移り変わってしまえばたちどころに失われて、あとは人に侮られ軽蔑^{さへ}されるだけです。やはり「才^{やまとだましひ}をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるるかたも強うはべらめ」と。文献上『源氏物語』が初出となる「大和魂」の語は、平安時代には、後世の“日本民族固有の精神^{きん}”といった意味ではなく、「才」(＝学才。学問によって身につける力)に対する“現実的な、実生活上の能力・才覚”の意で用いられます。『大鏡』で、菅原道真を讒言で政界から追い落とした藤原時平を、「才」は劣るが「大和魂」の優れていた人物と語っているのが象徴的な用例です。平安時代の学問といえば漢籍を読むこと、具体的には歴史書や儒家の経

典を通して、歴史を学び政治社会に対する理念を身につけることでした。光源氏は夕霧の将来を考えるにあたり、不安定な「世」の中を生きてゆくためには、柔軟に現実的に物事に対処する能力(大和魂)は必要だけれども、それだけではだめだと、基盤には学問を通してはじめて身につけ得る、社会や人生に対する理念がなければならない、それが大切なのだと考えるわけです。漢籍に深く通じていた作者紫式部の考え方が、うかがわれるような一節です。

さて、皆さんが入学する直前に起こった東日本大震災とそれに伴う原発事故以降、現実の日本社会は依然として希望の持ちにくい状況であり、むしろ混迷は深まっていると言いきかもしれません。今後の人生において、難しい局面に出くわすことも多々あるでしょうが、大学での四年間の学びを終えた皆さんに、私もやはり願いたいと思います。理念を欠いた現実家にはならぬように、と。生きた人間の姿をよく見て柔軟に対応しながら、自分なりの理念を見失うことなく、皆さんが豊かな人生を歩まれることをこの都留の地で祈っております。

未知の私との
出会いへ

英文学科教授
大平栄子

皆さんの卒業を前にして、いま次々と心に浮かんでくるのは、この4年間で印象に残ったたくさんのシーンです。白い息をはきながら朝練に励む運動クラブ員の姿。卒論提出の日の、達成感とまだやり残した課題があるという思いがないまぜになったゼミ生の様子。複雑な人間関係や否定的な自己イメージに悩みながらも、しっかり免疫力を蓄えていった学生の頼もしい成長ぶり。

本学から毎年管理職候補者を採用していただいている、あるITベンチャー企業の社長さんとお会いした折、その理由として本学の学生の層が厚いことをあげておられました。私も本学の学生の能力の高さに驚かされることが多く、卒論発表会の折などには、いつもこの年代が持つ成長力のすごさを実感してきました。反面、自分の能力の高さを自覚できず、自信を持っていない学生が少なくないことにも気づかされました。英語運用能力や批判的読解力を鍛えることもなかなかたいへんですが、それ以上に、学生の潜在能力を開花させ、自信をもてるように支援することがいかに難しいかを痛感してきま

おくることば

おくることば



英文学科准教授
Hamish Gillies

した。

最近、海外ボランティアに積極的に出かける学生や、充実した留学制度を利用して、研修に参加する学生も多くなりました。何がきっかけで自分の思わぬ力を発見するか分かりません。クラブやバイト先で鍛えられることもあったでしょう。「どんなことがあっても私は大丈夫」という気持ちで母校を後にし、さらなる自己の力を発見する世界へ旅立ってほしいと思います。それは周囲との協力の中で、無心になにかを達成しようという努力の中で、あるいはあきらめず夢を追い求める中で生まれるかもしれません。

最後に、困難の中、「それでも人は笑って生きる」ことができることを実感させてくれる小説を紹介して私の贈ることばとしたいと思います。イギリスの最高の文学賞、ブッカー賞の最年少受賞者であるインド系のキラン・デサイが書いた小説、『喪失の響き』(The Inheritance of Loss)は、祖父から孫へと喪失体験の継承を通じて、逆に頑なな人間不信の祖父が孫に心を開き、孫は喪失を恐れず「巣」から旅立つことができたという物語です。

Graduating from university is a major transitions in many people's lives: the transition from formal education to the world of work. As with any significant transition, it presents us with an important opportunity to reflect on life. And so, when asked to write this message for Tsuru students on the verge of graduation, several, somewhat conventional ideas came to mind first, for instance: *prepare yourself for life in a globalized world; keep developing your English ability*. While such advice may well be very practical, I could not help but recall the following extract from the speech given by the late Steve Jobs at the Stanford University Commencement in 2005:

'Death is very likely the single best invention of Life. It is Life's change agent. It clears out the old to make way for the new. Right now the new is you, but someday not too long from now, you will gradually become the old and be cleared away.... Your time is limited, so don't waste it living someone else's life. Don't be trapped by dogma — which is living with the results of other people's thinking. Don't let the noise of others' opinions drown out your own inner voice.

And most important, have the courage to follow your heart and intuition. They somehow already know what you truly want to become. Everything else is secondary.' (Steve Jobs)

Jobs' words really struck me because it is all too easy to live someone else's life, as it were, limited by their idea of who or what you should become. Of course it is perfectly natural for you as a fledgling adult to look for guidance from significant elders in your life, but however wise their advice may be, they are not you, they are not living your life, so they will not face the consequences of the decisions you make, or the actions you take. They will not feel the regret of paths not taken or opportunities missed, nor the reverse of course: the joy of fulfillment derived from allowing your unique gifts and talents fully flower. So my message to you boils down to this: worry not about outcomes or results, but rather follow your heart right now, confidently taking each step as it presents itself. As the Italian Renaissance philosopher, Marsilio Ficino, once wrote: *'Live for today, for the man who lives for tomorrow never lives.'*



ゼミの様子(1月22日
本棟の515室にて)

おくることば

人間力を磨け



社会学科教授
渡辺豊博

卒業おめでとうございます。すでに、多くの皆さんは、人生の次なる世界が決まり、期待と不安が渦巻く、落ち着いた日々を過ごされていると思います。

今後、現実社会に出ると楽しさや達成感、満足度とともに、今までに経験したことの無い社会の厳しさ、辛さ、空しさ、理不尽さ、不合理性などを身をもって実感することになります。

おめでたい旅立ちを前に、「冷水」を浴びせているようで申し訳ございません。世の常は、「どうにかなるさ、最後は親が助けてくれるさ、疲れたら友たちが励ましてくれるさ、耐えられなくなったら辞めればいいさ、生業を持たなくてもアルバイトでも生きていけるさ、成功のチャンスはどこにでもあるさ」など、社会を甘く考え、自分を買いかぶり、まずは、厳しい現実的問題からの逃避の気持ち、態度が優先してしまいます。現在大卒で就職後、3年以内で30%以上の若者が職場を辞めてしまい、その多くが生き場を失っています。

そこで、世の中を強く生きて行くための多様な「人間力」を伝授します。

①「自立力・自律力」—他人に依存・甘えず、身からの意思で行動し責任を持てる力です。②「全体力・総合力」—常に当事者から一步離れた立ち位置で冷静に物事を判断できる力です。③「調整・仲介力」—多様な利害者の立場と役割を理解しつつ相互を有機的な関係に誘導できる力です。

④「肝力・胃力」—実社会で必要とされる力で飲酒力、精神的に負けない胃の強靱性・食欲の力で体力維持が戦う底力になります。⑤「戦略力・戦術力」—物事に対して真面目にコツコツと対応するだけでなく長期的な視点をもち強く対応する力です。⑥「パートナーシップ力」—多様な人・組織と連携・協働する仕組みを創り束ねられる力です。⑦「冗談力」—笑いをとって賛同を得る力です。⑧「忍耐力」—心の整理棚を備えのしかかってくる重圧を上手に回避する力です。⑨「現場力」—地域課題を実践力で具体的に解決できる力です。

最も大切な人間力は、⑩「愛情力」—常に弱者の目線で物事を考え他人を思いやり助ける共助の意思と哲学を研鑽していく力です。戦っていただく。

希望の持つ力



比較文化学科教授
伊香俊哉

「人生、山あり、谷あり」という言葉があります。皆さんにとって今はどのような時なのでしょう。都留文に入ったこと自体、「山」だったのか、「谷」だったのかということもありますよね。受験が終ったとき、自分はずっと上の大学に行けたはずだ、行きたかったと思ってる人もいたでしょうし、入ってラッキーだったと思ってた人もいたでしょう。その後学生生活を過ごすなかで、いい友人とか恋人に巡り会えたとか、別れちゃったとか、充実した学生生活を送れたとか、送れなかったとか、大切な家族を失った人もいるかもしれません。そして卒業の時を迎え、約束された将来が目の前に広がっている人もいれば、不安な未来しか見えていない人もいるかもしれません。

人間、普通はやはり不調よりは好調を望むものでしょう。今、自分が不調の時にあるとすればどうすればいいのか。どうすれば谷を脱出して、山に行けるのか。不調の原因が、全く自分にはないと思えば、不調から抜け出すのは難しいことなのかもしれません。それでも山を目指そうとするならば、迂回をしてでも

おくることば

大学院修了生に
おくる言葉大学院研究科委員長
初等教育学科教授
鶴田清司

谷から脱する道を探しだし、あるいは切り開いて進むしかないのでしょう。

以前、比文のフィールドワークでアウシュヴィッツ博物館を訪れ、同館長であり、かつサバイバーであるスモーレンさんにインタビューをしました。スモーレンさんは語学力を買われてアウシュヴィッツに連行されてきた人々の名簿作成の仕事をさせられていました。私はスモーレスさんに、過酷な状況のなかで生きのびられると思えましたかと尋ねたことがあります。スモーレンさんは、生き残りたいという気持ちと希望を持ち続けたと答えました。そういう気持ちを持ちながら殺された人々も多くいたわけですから、そのような気持ちがあれば生きのびられるといえるわけではありません。ただそういう気持ちを抱き続けて、実際に生きのびることができたことは、その後のスモーレンさんの人生において無駄にはなかったのではないのでしょうか。スモーレンさんの人生は困難な時代を乗り切ろうとする人々へひとつの指針を与えているように思います。

修了おめでとうございます。

修士論文を書き上げて、晴れて修士の学位を取得されたわけですが、学部時代に卒業論文を書き上げた時とはひと味違った感慨、充実感に浸っているのではないのでしょうか。

卒業論文の場合は、学問的にみると通説になっているようなことであっても、自分なりの問題意識と課題設定に基づいて、自分で資料を収集・分析・考察するということができるのであれば十分です。審査の基準は、きちんと文献を読解しているか、データをきちんと分析しているか、論理明快に記述しているか……といったことが中心になります。

しかし、修士論文となると、それらに加えて、研究の独自性・新しさが求められます。つまり、先行研究のレビュー（到達点と課題の整理）を丹念に行ったうえで、先行研究を乗り越えることが必要になります。要求水準が格段に高まるのです。（なお、近いうちに本研究科における論文審査基準を明確化して公開していく予定です。）

いずれにしても、修士論文は本格的な研究論文として位置づけられるものです。研究職をめざして博士論文に発展

させようとする場合は言うまでもありませんが、公立学校教員などの教育職に就く場合でも、一つのテーマについて深く研究したということは大きな意味を持ててきます。教科内容に関する専門的知識を持つということだけでなく、生徒たちと共に新たな知を発見し、創り出していくような「知識創造型」の授業をデザインする上でも非常に重要な経験となります。なぜなら、アカデミックな研究態度・方法を教師が備えていると、授業が知識の単なる教え込みでなく、ある課題について生徒たちに深く考えさせ、探究させるような課題解決型の学び（アクティブ・ラーニング）の指導・支援が可能になってくるからです。教師は生徒たちの学びのモデル、探究のための先導者でなくてはなりません。それを手本として生徒たちも学び、探究していくのです。ある課題について深く研究したことのない教師がどうして生徒たちにそうした学びを体験させることができるのでしょうか。

以上で述べてきたことは、教職に限るものではありません。知の創造の喜びは、いかなる仕事であっても、その職能を高めるための原動力になるはずで、新たな課題の解決に向けて、大学院で培ってきた研究能力を存分に発揮してほしいと思います。

みなさんのこれからのご活躍を心よりお祈りいたします。

旅立つことば

夢・希望・
そして青春!!初等教育学科4年
加養孝善

私は「学校の先生になりたい」という夢を持って、この都留文科大学に入学しました。今振り返ると、同じ夢を持つ仲間たちと、共に学び成長していくことができた4年間であったと実感しています。

私は入学当初は、「中学校の社会科教師になりたい」と思っていました。もちろん今でも中学校教師への憧れはありますが、大学での授業や、仲間たちと教育について語りあう中で、3年生頃になると小学校教師も素敵な仕事だと思えるようになっていました。

3年生の9月。小学校での教育実習を迎えました。指導教員の「子どもたちと休み時間一緒に遊ぶことももちろん大切。だけど、一番大切なのはやはり授業なんだよ。子どもたちが、『面白い』『充実した』そんな風に思える授業をするのが、教師の一番の仕事だよ。そのことを忘れてはいけないよ」という言葉は、今



チーム千葉

でも私の胸に刻まれていて、私の今後の教師生活の信念になると思っています。また、教育実習の期間中、どの子どもも、その子なりに精一杯頑張っていると感じる毎日でした。そのような子どもたちと一緒に夢を見、未来を創る子どもたちに希望を抱き、寄り添い力になりたいと思うようになりました。

そして、大学4年生。将来千葉県で働く人たち（「チーム千葉」）と共に、将来教師になるべく、日々切磋琢磨してきました。その仲間達から、数多くの刺激を受け、たくさんのことを考え、学ぶことができたことを、とても嬉しく思っています。私は、そのような仲間に出会えたことを、とても感謝しています。夢を持ち、希望を抱き、日々共に努力する。そんな青春の1ページが新たに作れたことを誇りに思います。

この都留文科大学で学んだことを教育現場で発揮し、初心を忘れず都留を旅立っていきたく思います。そして、都留文科大学で出会ったかけがえのない仲間と共に、教師生活に励んでいきたいと思っています。今までありがとう、都留文科大学！

4年間を振り返って

国文学科4年
市村志帆

冬の寒さが厳しくなるにつれ、「卒業」の二文字をますます意識するようになってきました。私が都留文科大学に入学してからもう4年の月日が経つのかと思うと、驚きと同時にさびしさが胸をよぎります。故郷の茨城を離れ、初めての一人暮らしで不安も大きい中始まった大学生活でしたが、振り返ってみればこの4年間は私に様々なすばらしい出会いと経験を与えてくれました。

その中でも特に貴重な経験だったと思うものは、やはり国文学科で学んだ時間です。私は幼い頃から本を読むことが好きで、その影響からか文学・語学というものに興味を持っていました。都留文科大学へ入学したのも、自分の好きな「国文学」という分野を深く学びたいと思ったことが最大の理由です。この大学に入りたくさんの授業の中で学ぶことができたのは、まさに私が知りたいと望んでいた知識でした。上代から現代に至るまでのあらゆる時代の文学について学び、日頃何気なく使っている日本語の歴史について知ることができる時間は私にとって本当に楽しく充実したものでした。

旅立つことば

文大に入って
よかった。英文学科 4 年
淀川 剛

ゼミ合宿にて

また、3年生になり中古文ゼミに所属するようになってからは、さらに学ぶ楽しみが増えました。長瀬先生のご指導のもとで、同じゼミに所属する仲間たちと作品について様々な論を交わし、新たな疑問を見つけていくことは作品への理解を深めさせてくれ、私の見識をより一層広めてくれました。

勉学以外でも、所属していた剣道サークルでの活動、友人と夜通し語り明かした日のこと、地元の茨城とは違う都留の冬の寒さに凍えそうになったことなどここには数え切れないほどの思い出があります。そのどれもが私にとってかけがえのないものです。

卒業後、新しい土地での新しい生活が始まります。不安に思うことも少なくありませんが、この都留で過ごした4年間で得た多くの経験を生かしながら新たな一歩を踏み出して行きたいと思います。お世話になったすべての方々に向けて、4年間本当にありがとうございました。

2014年3月21日、私は文大を卒業する。日々の授業、はじめての一人暮らし、サークル、アルバイト、ボランティア、ゼミ、教育実習、教員採用試験、卒論……都留での4年間はあっという間だったように思えるが、本当に中身の濃い日々であった。

4年前、私は英語の先生になるという夢を胸に、期待と不安を抱えながらこの大学に入学した。学校の先生になることは私の小学生の頃からの夢だった。大学1、2年の頃は、授業、サークル、アルバイトの日々だったため、あまり教師という職業を身近に感じる機会は少なかったが、3年次に行った教育実習においてこれまでで最も教師という職業を身近に感じる事ができた。6年前までは生徒として通っていた母校の中学校の教壇に立って授業を行い、放課後の部活動まで指導させていただいた。教育実習での経験を通じて、教師は辛いことや大変なこともあるが、それ以上にたくさんの喜びや感動のある職業だと実感した。教員採用試験対策の際には、毎晩遅くまで友人と

一緒に勉強した。また、宮城県の現職教員である文大OBの方々やキャリア支援センターの先生方にもサポートしていただき、人と人とのつながりの素晴らしさを感じることができた。

私は4月から宮城県の中学校の英語教員として採用していただくこととなった。新たな生活の始まりに、不安と期待でいっぱいだが、この4年間で蓄えた大きな「財産」を糧に、堂々とした姿で教壇に立ちたいと思う。これからも学び続ける姿勢を忘れず、誰からも信頼される教師を目指すつもりである。

卒業を目前に控えた今、多くの後輩たちが「卒業しても都留に遊びに来てください」と言ってくれており、改めて私の第二の故郷都留で出会った人の温かさ、人と人とのつながりの素晴らしさを実感している。

最後に、今まで支えてくれた家族、先生方、友人、関わった全ての方々に心から感謝の気持ちを表したい。本当にありがとうございました。

「文大に入ってよかった。」胸を張って4年前の自分に伝えたい。



WILLCOMEの仲間たちと

旅立つことば

旅立つ言葉



英文学科4年
木下友華

Having studied for four years at Tsuru University, I truly feel I was able to make my knowledge of my favorite major deepen. Especially, I did not just learn English literature but I explored foreign culture and religion anew, and pedagogy profoundly.

In my English Literature class, reading the works of British writers and poets inspired my sense massively, and I felt what the writers and poets wanted to appeal society and people at that time and people who live in the near future. Reading books and poems in English gave me beautiful feelings and expressions which I cannot experience just reading in Japanese.

In my Special English Education Seminar, I have acquired useful knowledge which helps when being an English teacher. We went to teach English to high school students having devised a class in English. Having done such experimental teaching I could get student's responses directly, and it told me how interesting and difficult it is to teach students English.

The classes mentioned above were so interesting and stimulating, but of course there are many other classes which inspired me but which I am unable to write about here.

However, taking British culture seminar, run by Hamish Gillies, aroused me the most. I had been inquisitive about British culture and history, and I thought I already knew about the UK so much myself. However, having taken this seminar, I realized how my knowledge was lacking. Although the class met just once a week, learning about the British Monarchy and different dialects of British English was so interesting for me that I started to study myself about them, reading books or watching movies. All of the things I learnt in this seminar helped my study abroad to the UK so much and this experience told me how much I should know Japan, my own country, as well. Consequently, attending this seminar gave me an opportunity to understand how studying should be never-ending.

Besides my classes, interacting with my fellow students has also been a very important part of my time at Tsuru University. My fellow seminar members, with their wealth of knowledge, gave me unending advice regarding my graduation thesis. My fellow tennis club members, and their friendly rivalry, cheered me up when I had hard time. And even just laughing and chatting about nothing in particular with friends over dinner made my university life so special.

I am going to cherish all my memories at Tsuru University and make my knowledge I got while at this university go a long way. Thank you so much Tsuru University!

4年間で得た大切なもの



社会学科
現代社会専攻4年
田中優衣

都留に来て4年の月日が経ちました。入学する前は、初めての一人暮らしや新しい友人関係を作れるのかという不安、自分が学びたいことを学べることや部活・サークル活動への期待という両方の気持ちでいっぱいでした。実際に4年経ってみて思うことは、都留文科大学で過ごすことができ本当に良かったと思っています。



第44回つる子どもまつり集合写真

大学生活を振り返って思い出すことは、「つる子どもまつり事務局」での活動です。年に1度のつる子どもまつりはもちろんのこと、年間を通して地域の子どものことを考えたり、実践活動を行ったりしてきました。それを考えていく中で、意見がまとまらず、朝方になるまで話し合うこともありました。しかし、つる子どもまつり当日

旅立つことば

に、子どもたちの笑顔を見ると、今まで苦勞して準備をしてきたことへの達成感や感動で胸がいっぱいになりました。楽しいことばかりではなく、つらいことも多くありましたが、分かり合うまで話し合うこと、仲間と一つの目的に向かって本気で考えることの大切さを学ぶことが出来たと思います。

また、もう一つ上げるとすれば、進藤先生のご指導の下、3年間「現代社会論ゼミ」に一生懸命になれたことです。進藤先生は一見難しく見える民主主義や社会保障などについて私たちがわかりやすいような切り口で説明してくださったので、学ぶ楽しさを感じることができました。また、堅そうに見えて実はおちゃめな先生なので、ゼミも和やかな雰囲気毎回のゼミが楽しみでしかたなかったです。ゼミの仲間も学ぶことに対して積極的な人ばかりであったので、切磋琢磨しながら学ぶことができたと思います。

卒業後、新しい生活が始まります。期待よりも不安が大きく、くじけてしまいそうになることもあると思います。そんな時は都留で仲間と過ごした4年間を思い出し、私なりに一步一步進んでいきたいと思っています。最後になりましたが、4年間私を支えてくださったすべての方々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

これまでの私、
これからの私

社会学科
環境コミュニティ
創造専攻 4年
桑木晃太郎

都留文科大学で過ごした4年間は私にとってとても大きなものでした。新しい生活や大学生ならではの刺激に満ちた体験。そして就職活動や卒業論文などの苦難。多くのことがありましたがこれらを乗り越えるたび、少しずつ私は大人へと成長していったのだと感じます。

大学生活では多くのことを学びましたが、特に私がこの4年間で感じたことは大きく分けて2つあります。

1つは「私は多くの大人に助けられ、支えられて生きている」ということです。日頃の生活でもそうですが特に就職活動と卒業論文ではこのことを深く感じました。

就職活動では両親に多大な負担をかけてしまい、また卒業論文ではゼミの先生を初めとして多くの人に力をお借りしました。このことは非常に心苦しく思っていますが、それと同時に私も将来一人前の大人になった時、私がしてもらったことと同じことを若者にできるようになりたいと強く感じました。私は未だに半人前です。そのためこれから社会に出ても多くの人に迷惑をかけ続けてしまうでしょう。

しかし中でも一歩ずつ前に進み、いつか自分を支え続けてくれた人たちのような立派な大人になりたいと強く思いま

す。それが私がこの大学生活で学んだことの一つです。

そして2つ目は「友人の大切さ」です。大学生活は楽しいこともあれば苦しいこともありましたが、しかし中でも友人はどんな時でも一緒にあり、私を支えてくれました。

そんな友人は私にとって誇りであり、一生の宝物です。これからはそれぞれ別の道を進むことになりますが、たとえ遠く離れてしまっても私の想いは変わることはないでしょう。そして久しぶりに再会するようなことがあれば、以前よりも大きな人間になったと友人に自慢ができるような、そんな人間になれるようにこれからの厳しい日々を乗り越えていきたいと思っています。

都留文科大学での4年間は苦しいこともありましたが、やはり私にとっては楽しい4年間だったと胸を張って言うことができます。それは友人、両親、お世話になった先生方のおかげです。本当にありがとうございました。

そして、そんな4年間を作ってくれた都留文科大学にも感謝を。ありがとう都留文科大学。



ゼミの仲間たちと

旅立つことば

感謝を胸に



比較文化学科4年
小林紗弥

卒業を目前にして、4年前の春の日に、都留文科大学の一員として迎えられた入学式のことを思い出します。故郷を離れ、見知らぬ土地での一人暮らしに大きな不安を抱えながらも、それ以上に、これからどのような大学生活が待っているのかという夢と希望を抱きながら、新しい環境へと踏み出しました。あの日からはや4年、今日まで私は多くの人の庇護のもとで、全国から集まった志の高い仲間たちとともに、かけがえない豊かな歳月を送ることが出来ました。

大学では、主体的・能動的に学ぶことが求められ、高校までの学習環境との違いに戸惑いを覚えながらも、積極的に学びを進めました。特にゼミでの活動は、私にとって多くの刺激を与えてくれるものでした。ただ知識をつけるだけでなく、自ら課題を見つけ

それをどれだけ掘り下げていくか。考察結果をいかに分かりやすく相手に伝えるか。また、卒業論文を執筆するにあたって、正しい答えのない問いに対してどのように論理的に構成し結論を導くべきか、ということを経験した経験は、私を一回りも二回りも大きく成長させてくれました。これも偏に、丁寧に指導してくださった伊香先生と、共に悩み励まし合ったゼミの仲間たちのおかげだと感じています。

ゼミに限らず、大学生活は出会いに恵まれたものでした。何も分からなかった私たちを教え導いてくださった先生方。大好きな音楽を共に作り上げた吹奏楽団の仲間たち。可愛がっていただいたバイト先の人々。私たちの学びを温かく見守ってくださった地域の皆さま。そしてなにより、いつも私を応援してくれた家族には感謝をしてもしきれません。都留での出会いは私にとって一生の宝物であり、こうした沢山の人の支えがあって今の自分があるのだと、改めて感謝しています。

4月からいよいよ社会に出ることとなります。都留文科大学で得た経験を糧にしながら、今後も周囲の人を大切に、成長し続けていける人間でありたいと思います。4年間本当にありがとうございました。



伊香先生とゼミの仲間たち

「教員」から「教師」へ



文学専攻科
教育学専攻
水野健吾

都留での大学生活はあっという間に終わってしまいました。中身は本当に濃いものでした。私は社会学科現代社会専攻に5年間、文学専攻科に1年間在学しましたので、都留で6年間を過ごしました。この4月からは小学校教員として社会に出ていくことになります。

当初は、社会学科に在籍していたこともあり、中学校か高校の社会科の教員になりたいと考えていました。それも今考えると、自らの意思で「社会科の先生になりたい」というよりは、身内に中学社会の教員がいたことで、ただ何となく「自分もそれでいいか」としていたように思えます。それが、はっきりと「小学校の先生になりたい」と考えるようになったのは、大学4年次に、地域の小学校に陸上記録会の練習のお手伝いとして、何度か通うようになってからです。一緒に活動していく中で、目に見えて成長していく子どもたちに“喜び”と、それに関わったことに対する“やりがい”や“手応え”を感じたことは、その後私が教員採用試験に取り組んでいくための大きな“原動力”になりました。さらに、「教育」

旅立つことば

という分野についてより専門的に研究し、今後の教員生活に生かしていきたいと思ったことで、専攻科への進学を決めました。

今年の専攻科生は、去年に引き続き5人と決して多くはありませんでしたが、一人ひとりの深い教育観と、研究に対する意欲の高さは、“専攻科”という空間を形成するうえで欠かせなかったと思います。また、私たち専攻科生を授業内外で指導してくださった先生方には、本当にお世話になりました。ここで学んだことは、これからの教員生活にきっと活かされると思いますし、むしろ自分で活かしていかなければなりません。

以前、研究論文の指導教員でもあった鶴田清司先生に「教員」から“教師”になることが大切であると教えていただきました。“教員”とはあくまで一員にすぎず、現場に出て学びつづけてこそ、一人の人間としても立派な“教師”になれるということです。教員採用試験に合格することがゴールではありません。むしろまだ、スタートラインにただけです。今まで社会に甘えてきた分、これからは少しでも貢献できるよう、子ども達と精一杯学びつづけていきたいと思います。

全てつながる日々



大学院国文学専攻
柄澤尚美

2000年代、一世を風靡した『世界の中心で、愛をさけぶ』（片山恭一著・小学館）。この作品に心をつかまれたのは学部3年生の夏休みでした。もともとは「君」と「ぼく」の二者のみで閉じられた世界について書いた作品を網羅的に扱い、現代の小説作品の主題を見つけ出すという果てしない研究をしようと夢見ていました。実際に手をつけて難しさを痛感。その後、指導教員の阿毛久芳先生に作品を一つにしぼるよう助言をいただき、研究を方向転換。研究対象を「セカチュー」に決定。何度も読み返し、アキと朔太郎のやり取りに涙しながら、卒論を完成させました。一つの作品を深く読み込んでいくことのおもしろさに震えた論文制作でした。阿毛先生のご指導がなければ、あのような感動を知ることはできませんでした。

大学院1年次には、同期がいなかったため先生方とのマンツーマン授業という贅沢な時間を過ごしました。戦後の国語教育についての牛山先生の授業、翻訳小説を扱った野口先生の授業、古事記にあ

らわれる古代思想に触れた鈴木先生の授業。毎回新しい発見ばかりで、とても幸せでした。長瀬先生には2年間通してお世話になりました。近現代の文学研究とはまた異なる研究の方法が新鮮で、研究の姿勢を見直すきっかけをいただきました。

2年目、古川先生の授業では全く違うアプローチが幾つも重なることによって理解度が高まるという議論のおもしろさを教えていただきました。

また、阿毛先生には学部からおよそ4年間という長い間、お世話になりました。日々の授業はもちろんのこと、研究論文発表というまたとない機会をいただきました。この場をかりて感謝申し上げます。

院2年間の授業には何一つ無駄はなく、全てが研究とこれからの生活に役立つものでした。6年前、不安でいっぱいだった18歳のわたし。大学の仲間、両親、そして先生方、多くの方々のおかげであの頃とは比べ物にならないほど成長することができました。本当にありがとうございました。



2年間お世話になった講義室

旅立つことば

旅立つ言葉



大学院
社会学地域社会研究専攻
王維穎

京都で日本語学校に通っていた私が都留文科大学を受験することは、研究室でちょっとした話題になったそうです。初めて電車の揺れとともに都留にやってきたとき、目の前のあまりにも田舎的な景色に茫然とした自分がいました。あれからすでに2年が経ちました。たくさんの思い出を振り返ってみましょう。

まずは大学院に入るのは、もちろん勉強のためです。正直、最初は日本語で修士論文を完成させることすら自信がありませんでした。授業では自分の知識の足りなさを感じ、大学時代を無駄に過ごしたことを痛感しながら、休憩時間を削って勉強する日々でした。漸くコツを掴み、初めての成果を得たことを感じたのは、懸賞論文で佳作賞を得た頃でした。もちろん、他の応募者が全て学部生であり、人より何倍も先生の指導を受けたからだとは思いますが、



私と後輩たち

私にとって大きな励みになり、そこから得た自信も修士論文の完成に大きな影響を与えました。

次は、人付き合いです。「どうして京都からこんなところに来たの」と、よく聞かれます。最初は「富士山を見たいから」としか答えられなかった私は、2年経った現在、「きっと私は都留の優しい方々に会うためにここに来た」と思っています。ここには、居心地の良い研究室という毎日安心して勉強できる環境をつくってもらった優しい先輩たちとかわいい後輩たちがいます。よくお菓子を分けてもらった事務室の小俣さんがいます。いつも優しくかつ丁寧に指導していただいた恩師の進藤さんがいます。これ以外にもたくさんの優しい方々がいます。この場を借りて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

最後は自分へ、そしてここにいる留学生たちへの一言です。私たち留学生は、自分という個人だけでなく、母国の顔としてここにいます。国の名前に恥をかかないように人より何倍も努力すべきです。私はこれから常にこれに照らして強く生きていきたいです。

勉強が仕事



大学院
英語英米文学専攻
三沢奈央

大学院最初の授業で竹島先生がおっしゃった言葉が今も頭に残っています。「皆さんの同級生はすでに社会に出て頑張っていますが、あなたたち大学院生は、勉強することが仕事だと思って頑張ってください。」その言葉を聞いて、援助してくれている家族に対する責任、人生の大事な時期を費やしている責任を感じ、悔いのない2年間にしようと心に決めました。

授業が始まると、周りの院生との知識量の差に気づかされました。恥ずかしい話ですが、学部時代の私は文学研究に関してそれほど熱心な学生ではなかったのも、スタートラインが周りの院生より遅れていた分、その差を埋めようと必死になりました。授業内では課題に関する議論の機会が多く設けられましたが、知識なしに議論は成立しませんでした。課題に対してどれだけ深く考え関連知識を追求したかが議論を成立させるために重要でした。1年目は授業も多かったですが、忙しい中でも多くのことを学べました。これも、周りの院生の存在があったからだと思います。

2年目に入ると、教育実

旅立つことば



大きな刺激を受けた台湾留学

旅立つことば

大学院比較文化専攻
篠原双葉

習、教員採用試験、台湾留学、修士論文などの課題が待ち受けていました。特に前期は、実習、採用試験、台湾留学が重なり、いかに自分自身に負けずに地道に勉強できるかが鍵となりました。この時期私を支えていたのは、家族や教授陣、友人たちの励ましの言葉や、仲間の存在、そして大学院生としてのプライドでした。特に、指導教官の儀部先生には、毎回激励の言葉をかけていただき自信を持つことができました。また、中地先生には修士論文を書く上でのヒントを頂いたり、台湾留学に同行していただいたりとお世話になりました。三浦先生には、採用試験の際に役立つ情報をいただき、合格への手助けをしていただきました。これらの支えがあたからこそ、悔いのない大学院生活を送ることができました。

4月からは、東京都で教員となりますが、大学院で身につけた学ぶ姿勢をこれからも維持し、より飛躍できるよう頑張りたいです。

都留文科大学で学んだ私の6年間は「知りたい」という気持ちで満たされていました。自分で授業を選択し、興味の赴くままに様々な場所に足を運びました。中でも一番印象深いのは、修士課程2年目に中東のイスラエルとパレスチナに行き、現地の家庭にホームステイをしたことです。私がその2つの国に興味を持ったきっかけは、高校生の時に見たテレビのニュースでした。しかし、日本から遠く離れた地域のセンセーショナルなニュースは、当時の私にとって現実のものではありませんでした。大学に入り、関連する本を読んだり映画やニュースを探したりしても、やはり非現実的な出来事であるという感覚は拭えませんでした。しかし、そうやって自分なりに勉強していくうちに、写真や映像ではなく自分の目や足を使って両国の間で何が起こっているのか見てみたい、という気持ちが湧きあがってきました。こうした思いから、私はNPOが主催するスタディツアーに申込み、まだ肌寒かった3月上旬、テル・アビブ空港に降り立ちました。現地で見たり聞いたりしたことは、本や映像から得た知識に血肉を与えてくれました。エルサレムの埃っ

ぽく生活感にあふれた様子や、両国を隔てる「分離の壁」の冷酷さ、難民キャンプに漂う寂しさなど、自分の体を使って感じたことは今でも鮮明に思い出することができます。そして、そのようにして頭に染み込んだ風景は、日本に帰ってきてから現地のことを勉強し直すための動力源になりました。

両国での体験にとどまらず、私が大学で学んだことは、自分から知りたいと思って動けば門戸は常に開いているということ、私たちに必要なのはそこに飛び込んでいく勇氣だけだということです。大学生という、少し時間に余裕のある立場だからこそできる事はたくさんありました。また、大学でできた友人や指導して下さった先生方との出会いは、私にとって何にも代えがたいものです。貴重な六年間を都留文科大学で過ごすことができたということに感謝しています。



ツアー参加者と死海にて

初等教育学科 平成26年度卒業論文題目

麻場 一徳ゼミ

- 足立 裕紀 十種競技の競技記録に関する分析的研究
池内英里香 スプリンターのタイムに関する研究
—100 m走と200 m走の相対関係から—
大池 優介 小学校の投運動における指導方法に関する研究
沖田真理子 都留文科大学陸上競技部 M.O の12年間の記録の変化から見る一考察
小野 駿太 日本と諸外国の体育指導についての研究
清野 文翔 血液性状からみた短期間低酸素トレーニングの効果に関する研究—陸上競技スプリント系選手の場合—
高須 力樹 100 m競走におけるスタートから10 mまでの歩数がタイムに及ぼす影響
野坂 優 100 mハードル走における競技レベルとハードリング距離の関係性
細田友里絵 短期間低酸素トレーニングの効果について—400 m選手及び800 m選手の違いに着目して—
宮野 祐太 走幅跳の技術的要因が記録に及ぼす影響
田牧 陶子 小学校プールにおける安全への取り組み

市原 学ゼミ

- 岩月友里亜・大木 美和・五明ありさ
米山まりな・秋江 朋音
心理測定におけるテスト理論
池田 智絵・長田 理子・水上 若南
三枝はるな・藤川 京子
日本人は本当に自尊感情が低いのか？
伊藤 侑馬・江田 一貴・安部 喜敬
項目反応理論による大学生用健康調査の検討
和田満智子 育児不安と母親のニーズ

岩永 正史ゼミ

- 石原 由貴 小学校国語科におけるPISA型読解力を育てる授業実践—NIEの実践を参考に—
及川 悠香 石原千秋「国語教科書の思想」の研究
佐藤 由紀 フィンランドの国語教育の研究
～日本の国語教科書との比較を中心に～
高谷美有紀 「聞く」力を育むための学習指導の研究
—メモの効果の検討を通して—
辻中 健斗 現代児童文学 教科書化の可能性
平野 卓 国語科における方言と共通語の指導
～会津方言を例に～
横井 佑佳 小学校国語科における効果的な音読指導のあり方

岡野 恵司ゼミ

- 岩下 翔平 数の生い立ち
采野真佐斗 ε -N 論法を用いた数列の収束の定義で厳密に収束を示す
大久保優香 子どもが夢中になれる江戸の算法—和算—
酒向 志保 算数単元項目の苦手意識調査と、子どもの算数学習意欲を向上させる指導法の研究
高橋 有斗 円周率—歴史と計算—
武村 敏生 正多面体の展開図とタイル貼りの関係
長原 侑祐 数列と調和級数
中村 海 フィボナッチ数列と黄金比の甘く密なる関係

春日作太郎ゼミ

- 望月 雄隆 ICT教育の是非

後藤 道夫ゼミ

- 井口 卓也 ブラック企業の実態
岡崎ちはる 新撰組の研究—新撰組における思想の潮流—
梶 純平 原発労働者の実態について
唐澤 稜 労働社会に活かせる学校教育
櫻畑 淳 日本の教員の労働の現状と課題
俵 尚貴 スポーツ選手の生活保障
前川 清和 日本の奨学金問題
新田 愛美 若年層の就業と自立
吉成 大地 生活保護申請の実態

坂田有紀子ゼミ

- 稲澤奈津稀・大下 映
富士山精進口登山道付近のテンの食性
—テンは種子散布に寄与しているのか—
大村 真美 サクラの蜜腺は何のために存在するのか？
—蜜の分泌量と〇〇との関係—
高尾みのり 都留文科大学キャンパス内のマムシグサ（ミミガタテンナンショウ）の分布と生態
藤田 雄喜 知っているようで知らないカラスの行動について in 都留文科大学
西山 浩平・矢本 千恵
「つるりん」のため池生態系の生き物たち
渡辺優太郎 「つるりん」の植物たち
—移入プロセスと更新動態—

柴田万里子ゼミ（佐藤 隆ゼミ）

- 伊藤 百代 教育政策から見る地域と学校の現実と可能性について
小笠原 藍 「特別な教育的ニーズ」のある子どもとともに学ぶための教師の課題

古本菜津子 教室に「安心と信頼」を築くために教師としてできること—ネル・ノディングスの「ケアリング」の概念を中心に—

初鹿 貴大 小学校外国語活動の実際の検証と展望

花山 泰裕 食の可能性—攻めの学校教育に向けて—

平林 大弥 デューイから学ぶ「経験」

山中 雄飛 競争原理を越えてひとりひとりを生かす教育

山中友里江 子どもの心と向き合う生活綴方教育について

渡邊 由美 個性尊重における「個性」のとらえ方—一人ひとりの子どもたちと向き合うために—

清水 雅彦ゼミ

大澤 七恵 音楽と他教科のかかわりについて—教材化と授業実践—

奥村 瞳 人生を豊かにする音楽

小林なつ美 音楽と博覧会—フランス近代音楽とパリ万国博覧会から考える—

郡司 家慶 人間にとって音楽はなぜ必要なのか

齋藤 美奈 音楽と感情の関連性

佐竹 理 音楽に求められる楽しさ

茂木 春菜 心を豊かにする合唱教育とは—子ども達の心を育てる合唱指導を目指して—

渡辺 正親 日本の合唱と海外の合唱—その違いと考察—

梶守 光恵ゼミ

石川 絵理 ショパンのピアノリズム—『幻想曲』作品 49 を追究する—

片山実可子 モーリス・ラヴェルを追及する—ラ・ヴァルスを中心とした音楽作品について研鑽する—

柴田 彩 音楽におけるリズムの重要性—打楽器の歴史と役割の視点から—

橋本 円香 現代の音楽教育について考える—感性を育む教育を追求する—

藤森明日香 バリ島のガムラン音楽—ガムランの歴史の変遷と音楽的特徴—

松村 秀哉 ヴィルトゥーゾ フランツ＝リストについて—フランツ＝リストの生涯と音楽作品に焦点をあてて—

安田真奈恵 心と音楽のつながり—音楽療法が心に与える影響—

添田 慶子ゼミ

川村 純平 睡眠が及ぼす人への影響

久保 圭 柔軟性とけがの関係から考えられるけがの予防についての研究

佐野 純一 食育の歴史—これからあるべき食育の姿

古屋慎太郎 人種差別とスポーツ

平 和香子ゼミ

石井 瑠璃 編み物実習における手先の巧緻性と指導に関する一考察

岸部 文佳 小学校外国語活動の教育効果と課題に関する研究

佐々木千翔 保育園におけるパネルシアターを用いた実践

佐藤 知美 学校給食における輸入食材の使用状況と課題

塩澤みなみ 生活設計教育におけるウェディングドレス制作の意義—高校生の職業観・恋愛観・結婚観・家族観の意識形成に関する有効性—

西室 和美 保育園児を対象とした食育教室の取り組み

三宅 悠翔 保育所における野菜栽培活動

荻原 弘朗 食育における学校給食の役割—自校・センター方式の比較—

高田 理孝ゼミ

小野寺亜紀 知的作業における BGM の影響について

風間 幸代 義務教育中の障がい教育が与える障害児・者に対する多次的態度への影響

小宮 晃 写真による第一印象—相貌と性格特性の認知—

金野 翔太 自己効力感に文化的自己観・原因帰属が及ぼす影響

三枝 李成 自己評定値と時事問題の解答におけるメタ記憶の役割について

玉井 慎一 知的作業における BGM の影響について

筑井 渉 大学生におけるコミュニケーション・ツールの使い分けについて

永田 知香 対人依存の表出と抑制に親の養育態度が与える影響

新田 滉貴 自己効力感に文化的自己観・原因帰属が及ぼす影響

星 来美 兄弟構成と人格形成について

武川 里菜 大学生の自己開示傾向とハーディネス性格特性の関連について

竹下 勝雄ゼミ

野口 葵 鑑賞教育について考える

紺野 祐美 美術館の展示における考察

笠井さなみ 作品から導かれる児童の心理状況

栗田 彬世 溪斎英泉の作品の魅力

中河真奈美 表現活動における読み聞かせの在り方についての考察

野澤 佳永 図画工作科が得意になる授業の在り方

田中 昌弥ゼミ

渡邊 裕都 子どもの学習意欲の低下と教師の実践の可能性—実践家の共通点と相違点から考える—

森本 裕司 これからの社会を生きる力、「自己教育力」の育成に関する考察—ならされる自分から、なりたい自分へ—

尾崎 友香 子どもと信頼関係を結ぶ教師のあり方—これからの教師が育つためには—

蔵盛 知世 インターネット社会の未来と学校の役割

相徳 千夏 Active Learning における教師の働きかけ

吹明香美由 これからの時代における生活科のあり方—生活科設置の背景と授業実践から探る—

坂野 直人 新しい道徳教育を目指して

渡辺紗也加 これからの学校づくり—学校批判論を通して—

筒井 潤子ゼミ

- 池田 千尋 子どもの育ちと親の関わり ―親も1人の人間であるということ―
- 小俣紫穂理 子どもの「荒れ」と感情に向き合う ―子どもと関わる大人としてできることとは―
- 大森 玲央 大人の意図していないところで傷つく子どもたち ―影の要因を自尊感情から考える―
- 川尾 優希 子どもと向き合う ―個別支援(SAT-C)の体験から援助の本質を考える―
- 佐藤 有紗 不登校へのまなざし ―不登校から考える学校の意義―
- 富田 翔子 「先生」の指導と子どもを見つめて ―大西忠治氏の指導観に触れて―
- 萩原 健人 学級集団の中で生きていく子どもたち ―学級との関わりから育まれるものとは―
- 山口 慶華 「表情」がもたらすもの ―子どもたちへ「表情」と共に寄り添う重要性―

鶴田 清司ゼミ

- 秋山 将平 伝え合う力を育てる授業 ―協働的対話能力を中心に―
- 柿部 奈央 特別支援教育の発想を生かした授業づくり ―ニーズのある子どもも共にみんなでつくる学び合いの場―
- 片倉由美子 発問づくりの原理・原則 ―国語科の物語教材を中心に―
- 近藤 凌司 子どもは自ら学ぶことができる！―フィンランド型教育を取り入れた小学校の実践―
- 杉本 啓聡 国語科における対話活動の有効性とは ―説明的文章教材を中心に―
- 住友 志帆 自己学習力を育てる授業 ―子どもたちの学ぶ意欲を高めるために―
- 寺浦 美波 学び合いの授業づくり ―学びの共同体の授業を通して―
- 中野 明美 全員参加を保障した授業コーディネート ―子どもを惹きつける導入づくりを軸に―
- 村田 茜 絵本を教材として導入するには

寺川 宏之ゼミ

- 磯部 菜摘 算数的活動の有効性
- 川瀬奈津希 初等数学からみるペル方程式
- 草島 亜紀 i のない三角関数
- 中島 浩至 “魅”せる算数授業
- 中村 遥平 微分積分学
- 橋本 諒 算数授業は誰が創る？
- 三村 桃子 負の数―負の乗法―

鳥原 正敏ゼミ

- 池本 唯 図画工作における鑑賞と評価についての一考察 ―使う作品・残る作品―
- 佐藤 優海 図画工作における指導観についての一考察 ―キット教材を通して―
- 長谷川仁義 「らくがき」の持つ教育的可能性についての一考察 ―図画工作の活動を中心に―

- 福本 桃子 図画工作における鑑賞活動についての一考察 ―他者を理解する力を育む活動―
- 武石 一成 美術教育を中心とした他教科連携についての一考察
- 水谷 美保 図工教育における自己と他者の関係についての一考察 ―苦手意識とはなにか―

中井 均ゼミ

- 佐々木宏海・村上加奈実・村松 秀憲 大月市菊花山石灰岩の堆積相と含有化石の研究
- 中野 亜美・村松 幸代 東海地震に関する防災教育―浜松市・掛川市を例とした教材化―
- 藤田 有也・保母 萌子 石垣島の海岸砂の研究 其の一
- 矢野 稚加・渡辺 詩乃 石鎚山の地学的特色を生かした教材化

西本 勝美ゼミ

- 岡野 正和 子どもが学びの主体となるために ―生活現実と結び、当事者意識を育む―
- 加養 孝善 地域の力を活かした教育 ―開かれた学校づくりを中心に―
- 田邊 彩織 食の体験がもたらすものとは ―作り、育て、食べる実践を通して考える―
- 中村 咲 わかりあい、共に地域で生きる―心のバリアフリーを目指す実践を通して―
- 政井 学 子どもの参加を保障する学校 ―子どもの意見表明に向き合うために―
- 南澤 佳奈 地域が子どもを育てる社会へ ―地域文化の教育的意義をさぐる―
- 村山 祐太 子どもを問題視する大人たち ―大人と子どもの関係をつくり変える―
- 丹野 容邦 子どもに寄り添うための個別化学習 ―多様性を認め合う学びの形態とは―
- 清水 隆浩 「出会い」を仕掛ける ―「第三の場」としての図書館―

平野 耕一ゼミ

- 植田 清乃 理科教育におけるICT活用のメリット・デメリットについて
- 植松 苑美 小学校理科で学習する星座の位置関係が分かる教材作成
- 小尾 俊祐 小学校理科教育における『月と星』『月と太陽』の実験器具の開発
- 武井伸太郎 理科教育における可視化の有用性について
- 谷村 風華 I a型超新星を用いた宇宙項パラメータの決定
- 福田美沙子・吉田 朋浩 『音』分野を小学校で扱う際の実験マニュアル本の利点と考察
- 松井 咲子・和氣 京美 低学年から興味をもつことができる再生可能エネルギーについて

藤本 恵ゼミ

- 阿部 雄一 『悪人』と『悪の教典』に見る現代小説における「悪」
- 河西 美歩 子どもたちの思春期—綿矢りさ『蹴りたい背中』を中心に考える—
- 金子 直美 重松清『きみの友だち』から見える友だちの姿
- 紺野 梨奈 恩田陸『劫尽童女』論—伊勢崎遥という少女—
- 佐藤萌々子 荻原規子作品における女性の力—『RDG レッドデータガール』を中心に—
- 佐野 江里 国語教科書における宮沢賢治童話を考える
- 澤井 雅和 西尾維新『化物語』からみるライトノベル
- 清水 香歩 あさのあつこ論—生きる力のある十代—
- 立小川 茉由 現代社会に生きる『彩雲国物語』—雪乃紗衣が描いた世界に学ぶ—
- 宮澤 結 あまきみこ教材論—国語教科書教材としての魅力と可能性—
- 武藤 智子 江國香織が描く悪女—江國作品の女性観・男性観を探る—

森 博俊ゼミ

- 安藤 優季 特別支援学級児童の居場所意識に関する一研究
- 川村 七海 特別支援を要する子どもとの学級づくり
- 小西 美裕 小学校における障害理解教育のあり方
- 保坂 俊介 特別支援教育を担う教師の専門性
- 間宵奈津季 少年犯罪の背景と少年の「立ち直り」
- 宮木 萌 障害の「受容」過程に関する一研究
- 宮田 栞奈 通常学級における発達障害等の困難を抱える児童の支援
- 林 欣欣 外国にルーツを持つ子どもの教育問題

柳 宏ゼミ

- 上加世田直哉 ハンドボールにおけるクイックシュートに関する分析研究
- 飯野 遥香 コーディネーション能力習得についての研究—児童期の運動スポーツ経験との関わり—
- 井戸端 歩 バレーボール競技におけるレセプションの動作分析
- 井村 翼 ラグビーの認知度に関する研究—ラグビーの経験との関わり—
- 内田 樹 4 スタンス理論による技術向上に関する研究—バレーボール競技におけるアンダーハンドパスの場合—

- 小泉 真佑 バレーボール競技における二段スパイクの動作分析
- 小西 良太 ソフトボールのバッティング動作の研究—ゴロとフライの打ち方について—
- 春藤幸太郎 サッカースキルと身体能力との関わりの研究
- 仲地 星夜 ミニバスケットボールの指導に関する研究—指導者の言葉がけが子どもの意欲に及ぼす影響—
- 山内 凌祐 鉄棒運動（前方支持回転）の学習研究—フィードバックに着目して—
- 山坂 光司 トレーニング方法の違いが学習効果に及ぼす影響に関する研究—バスケットボールのジャンプシュートの場合—

山崎 隆夫ゼミ

- 井上 詩織 東日本大震災と震災後の子どもを支える教師—四人の教師の聴き取りから—
- 岡安 千捺 学級通信の力
- 上里 大樹 子どもの心の発達を支えるとは—負の感情と子どもの育ち—
- 蔵重 瑞葵 子どもにとっての豊かな学びとは—山崎隆夫の実践から—
- 椿野 友絵 子どもの「社会力」を育む自然体験活動
- 花城 紘香 発達に困難を抱える子どものいる教室での支援のあり方—子ども同士の関係性を豊かに育むために—
- 福井 愛 子どもの豊かな関係性を築くために—生きる姿と育ちの困難を見つめて—
- 山下 陽子 いじめを乗り越える学級づくりと教師の指導

山森 美穂ゼミ

- 北野 文香 食品添加物をきっかけにして化学に興味を持たせよう
- 重松加菜美 「溶ける」をより深く理解するための授業・教材
- 後藤 呂樹 漢字圏における化学用語—なぜ「酸」素というか—
- 中込 成貴 導線内の電子の流れを小学生に教える
- 牧野玲奈・茂木美咲 紫外線対策教育と化学をつなぐ
- 渡邊 拳也 雨が樹に降ったらどう変わるか—大学内の林外雨・林内雨・樹幹流の調査—
- 岩間 香苗 富士川水系一級河川重川の水質—硝酸性窒素の日変化の季節特性と年々変化—

国文学科 平成26年度卒業論文題目

上代文学 鈴木 武晴ゼミ

- 伊藤沙央里 上代文学における越後
一沼河比売の婚姻と史実—
白井ひかり 禁止する神話—見るなのタブーとその諸相—
岡田 菜摘 上代における常世の世界観
小田切愛美 長野県における天の岩屋戸神話
一戸隠を中心に—
川上やちほ 上代文学から見る「鬼」
木村 愛美 古代天皇と神
木村 元美 上代文学における動物の様相
高田 幸司 ヤマトノオロチの鉄と川
畑 愛恵香 『古事記』の石と花の聖婚神話
早坂 空音 『常陸国風土記』にみる嬬歌
廣井 佐江 駿河采女歌
本名 晴子 萬葉集における月
眞木 絢未 上代における紫
眞葛 恵 モノの境界—「化ける」を中心に—
三浦 響 『日本霊異記』にみる理想の親子像とは
宮下 凌瑚 自然災害と人々の認識

中古文学 長瀬 由美ゼミ

- 渡辺 彩乃 『蜻蛉日記』の和歌について
麻生 美沙 『源氏物語』頭中将論
安部 葉月 『とりかえばや物語』と『在明けの別れ』の
女主人公について
市村 志帆 勅撰三代集における哀傷歌について
大戸 絵美 『とりかえばや物語』宰相中将論
金久保有沙 『和泉式部日記』の虚構性
中村 真実 『枕草子』日記的章段について
森島 楓 『枕草子』類聚章段と随想章段の関係性
八鍬 知佳 藤原公任の和歌観
山本梨恵子 中古文学における雪について—物語を中心に—

中世文学 佐藤 明浩ゼミ

- 遠藤 桂花 『発心集』における長明の志向—『方丈記』
との関連を中心に—
島田美由紀 『とはずがたり』の中の後深草院について
白鳥あゆみ 式子内親王の百首歌—四季の和歌を中心に—
瀬谷 智子 『太平記』における讒言
宮澤 真梨 『平家物語』における形容詞・形容動詞—「やさ
し」・「あはれなり」・「むざんなり」を中心に—
森田 雪奈 『浦嶋太郎』
—物語の変遷とその理由について—

近世文学 加藤 敦子ゼミ

- 大橋 彩希 『雨月物語』の怪異について
木藤 拓馬 井原西鶴作品に見える五行と暦
五味優佳子 西鶴の描いた武士像の考察

- 佐々木あやめ 「平賀ぶり」についての一考察
鈴木 美咲 『おくのほそ道』における登場人物の役割と
構成
鶴橋奈々子 『本朝二十不孝』巻五ノ二「八人の狸々講」
についての考察
栃木 千穂 『堪忍記』から見る近世の堪忍観
松林 智美 北枝と芭蕉

近代文学 阿毛 久芳ゼミ

- 西澤 愛 村上春樹『パン屋襲撃』『パン屋再襲撃』『パ
ン屋を襲う』論
伊阪美友紀 「桜の森の満開の下」論
—秘められた安吾の孤独—
出口 理恵 石垣りん論—くらしの中で見つめたもの—
國廣 美貴 長野まゆみ『カルトローレ』論
倉持志保里 萩原朔太郎『月に吠える』論
櫻庭 瑞希 川端康成『掌の小説』論
迫田真祐子 梶井基次郎『檸檬』論
高楠 聖佳 有島武郎『カインの末裔』論—描出された「自
己」と仁右衛門像との関係性—
竹本 都未 江戸川乱歩『人間椅子』論
多田 愛 「銀河鉄道の夜」論
—宮沢賢治の死生観について—
供田 健吾 斉藤洋『ルドルフとイッパイアッテナ』論
広瀬 彩加 泉鏡花『海神別荘』論
深沢 加奈 「風の又三郎」論—確かに存在するもの—
松永 安由 赤い夢との邂逅—はやみねかおる『そして五
人がいなくなる』より—

近代文学 新保 祐司ゼミ

- 山内佐代子 川端康成『葬式の名人』論
佐藤 詩徳 菊池寛論
品村 咲季 梶井基次郎論
佐伯 晃太 坂口安吾『桜の森の満開の下』論
井関 楓 萩原朔太郎『猫町』について
加藤 晴生 中島敦論
—中島敦の作品は人の心に何をもたらすか—
権谷 あき 宮澤賢治文学の音楽性について
長嶺 壮悟 独歩文学の絵画性と「驚異」の思想
藤牧 稜 日本と『Self—Help(自助論)』

近代文学 野口 哲也ゼミ

- 池上 浩徳 現実に接続される夢
—江戸川乱歩「火星の運河」論—
泉田 七瀬 安部公房「壁—S・カルマ氏の犯罪—」論
—名づける行為と言語社会—
片田 萌 灰谷健次郎『兎の眼』論
—兎のモチーフを中心に—

工藤 麗加 芥川龍之介「地獄変」論
 一現実世界と夢想世界に現れる地獄—
 金 佳加 夏目漱石と写生文—「文鳥」論—
 坂本 実咲 川端康成『乙女の港』論—少女たちの行方—
 佐野 綾香 安部公房『箱男』論—「箱男」という匿名性—
 澤口 浩平 遠藤周作『沈黙』論—母なる神とは—
 西田 奈紗 三島由紀夫『女神』論
 一「女神」化に込められたアイロニー—
 西原菜津紀 梶井基次郎『檸檬』論—「私」の闇について—
 野呂瀬 亮 谷崎潤一郎『春琴抄』論
 一佐助に紡がれる物語—
 村田 一晟 『田舎教師』の研究
 一不遇な主人公像と花袋の描写論を中心に—
 森脇 裕介 『破戒』論—差別と告白—
 横家麻由美 太宰治『斜陽』論—かず子の夜明け—

崩 愛莉 佐渡方言話者の方言意識および使用実態に関する考察
 千葉 由希 大学生の呼称の選択
 津金慧莉佳 教科書におけるオノマトペの使用実態に関する考察
 中尾 紘歌 翻訳作品における女性文末詞について
 長澤 里穂 大学生におけるら抜き言葉の使用状況について
 中本 勝也 随筆文の当為表現や言い切りの形の時代における比較と考察
 松永 沙希 格助詞「を」の連続使用制限について
 森本 段 若者における一人称の使用意図とその効果
 山本真依里 意味の誤解が起こる日本語
 山本まりか 若者における西洋外来語の受容
 米澤 美智 広告コピーに見る、日本語の表記形態によるイメージの差異

近代文学 古川 裕佳ゼミ

藤田 優希 横光利一「春は馬車に乗つて」論
 柏木 龍弥 坂口安吾『我鬼』論—「鬼」をキーワードに—
 菅野 桜子 川端康成『乙女の港』における少女
 中島理沙子 三島由紀夫『愛の渇き』論
 原 康浩 石川淳『焼跡のイエス』論
 一語り手「わたし」の自意識を中心に—
 早馬 麻衣 草野心平『第百階級』論

国語学（古代語） 加藤 浩司ゼミ

羽左間恵美 院政期における仮名遣いに関する研究
 石村 小春 定家仮名遣の確立に関する一考察
 一冷泉家時雨亭文庫本『伊勢物語』と三条西家旧蔵本『伊勢物語』の比較を中心として—
 太田祈実子 形容詞「はづかし」の意味
 川野 誠 鎌倉・室町期における係結びの衰退について
 一係助詞「コソ」を中心に—
 川村 諒 評価形容詞の変遷—「よし」「よろし」「わろし」「あし」の四語を基に—
 小山 詩織 源氏物語における形容詞「うつくし」「らうたし」
 千葉 博喜 『今昔物語集』にみられる程度副詞について
 松下由香利 平安時代の清・美を表す形容語 きよし・きよらなり・きよげなり
 山崎 剛史 陳述副詞「もし」「たとひ」について
 今井 麻衣 古典語助動詞「べし」から関東・東北方言「べい」への変遷

国語学（近代語） 鈴木 芳明ゼミ

酒井 将哉 「アマリ」と「アンマリ」について
 宇賀神宏恵 若者の文字表記
 宇津山絢香 静岡県方言における語尾の分布と分類
 川崎 初美 会話における文頭の逆接・否定語について
 一「でも」を中心に—

漢文学 寺門日出男ゼミ

上井 沙織 『春秋穀梁伝』における礼思想
 於子 卓司 唐代伝奇小説における虎について
 木本 申明 『三国演義』の創作意識について
 後藤 勇氣 中井履軒撰『老子雕題』について
 小林 蓮 日中の音楽描写に見られる差異について
 篠原亜里沙 王維詩における「月」について
 高橋 晶子 白居易の詩における杏について
 鳥谷 久恵 王維詩における色彩感覚について
 三戸部健吾 『世説新語』における「酒」について
 望月 千愛 『楚辞後語』における文学思想

国語教育学 牛山 恵ゼミ

徳井 将平 国語教育に関する小説
 井手 真那 文学作品における「読み」の指導実践研究
 伊藤 麻希 国語教育と心理学—スキーマ理論を生かして—
 及川 未来 子どもが読みたい本と大人が読ませたい本—子どもの読書調査と考察—
 大房 秋臣 中学国語科における語彙指導
 大谷 純花 国語教材における食育の実践
 片岡 悠希 詩教育研究—三好達治の詩教材を読み解く—
 我那覇貴江 沖縄県の戦後教育
 後藤志緒莉 田近洵一の「読み」の理論研究—その一『言語行動主体の形成—国語教育への視座—』論—
 杉本 有華 山梨県の国語科単元学習
 須藤 貴仁 豊かな読書生活のために
 滝澤 千晶 国語科教材の読みが抱える問題—「走れメロス」にみられる徳目主義—
 増田 司 罪について考える文学教材
 杠 潤 高等学校国語総合における古文教材とその指導
 日下 舞子 学校図書館を活用した国語教育のあり方
 高橋 芽衣 言語論の研究—国語教育におけるあり方—

英文学科 平成26年度卒業論文題目

大平 栄子ゼミ

- 遠藤 千尋 V. Swarup の *Q&A* に見るインドの児童労働問題と NGO/NPO の活動
- 原田 佳苗 *Peter and Wendy* から見る母親像
- 青木 大起 第二言語習得における最も効率的な時期
- 青木佑香里 *Coco Chanel* と *Coco Avant Chanel* から見るココ・シャネルの人生について
- 岩倉 功治 Alex Ferguson's and Akira Nishino's Ideas of a Leader
- 杉山 知咲 *The Joy Luck Club* にみる移民一世の母国が母娘間にもたらす影響
- 津覇 萌美 *Adventures of Huckleberry Finn* から見る人種差別—自由を求めた主人公—
- 中田恵理花 3 *Idiots* から学ぶインドの教育問題
- 永橋 佑亜 食で見るディズニーアニメーション—*Beauty and the Beast*—
- 濱崎 円香 *Wuthering Heights* 研究—キャサリンの選択から見るビクトリア朝時代の女性の生き方
- 日原 舞 *I Don't Know How She Does It* から見るアメリカの女性のキャリア事情
- 堀内 茉莉 *The Namesake* に見る親子の異なるディアスポラ
- 由良 奈美 映画 *The Devil Wears Prada* の魅力
- 淀川 剛 The Significance of Existence of Bertha Mason in *Jane Eyre*

窪田 憲子ゼミ

- 小川 陽平 Postmodernism and Culture
- 荒谷 光 Lewis Carroll と消失 (vanishing)
- 上野 廣奈 Charles Dickens, *Oliver Twist* の「無垢」「貧困」「悪」—ディケンズの下層社会研究—
- 宇津木 諒 有機的世界として見る『ねじの回転』
- 大津明日香 ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』研究—エリオットの愛と Sympathy—
- 加々見駿也 『モロー博士の島』から見る進化と退化—現代科学の危機—
- 斎藤 綾香 *Oranges Are Not the Only Fruit*
- ジャネット・ウィンターソンの描く母と娘—
- 佐藤 茉歩 フィリップ・ブルマン「ライラの冒険」シリーズに見る現代の子ども像
- 立澤 梨沙 Jane Austen, *Emma* 研究—自己認識と現実—
- 西平 夢姫 Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* 研究—主人公の幸福と生と死—
- 宮崎 成美 マーガレット・ドラブル『礪白』研究—母性体験と女性の自己確立—
- 村瀬 衣里 魔女の予言は絶対か？—『マクベス』研究—
- 安野 一起 『ハワーズ・エンド』にみられる〈継承〉の意義
- 渡辺 芽衣 *Howl's Moving Castle* に見る生き方の自由

—Diana Wynne Jones 研究—

- 今津 達志 カズオ・イシグロ『浮世の画家』における救われない存在—戦争を生きた世代—

竹島 達也ゼミ

- 細越 佳奈 Arthur Miller, *The Crucible*, Lillian Herman *The Children's Hour*; Robert Anderson, *Tea and Sympathy* の3作品に見る1950年代アメリカにおけるマッカーシズム
- 田中ひかる *Gentleman's Agreement*, *Fiddler on the Roof*, *Conversations With My Father* の三作品から、反ユダヤ主義の社会を生きたユダヤ人についての考察
- 佐藤 知咲 *A Raisin in the Sun*, *The Dutchman*, *The Amen Corner* から見る黒人アイデンティティー
- 新林 由美 深層心理学的にみる Tennessee Williams の人間性と人間の本質に関する考察
- 鈴木智香子 *Angels in America* における妄想と現実の世界に生きた人々が示すアメリカ社会の闇と人間の本質
- 中澤 華子 劇作品から見る閉ざされた米兵の叫び
- 藤沢麻里奈 「人種」の概念に潜む希望と絶望
- 望月 沙織 *Conversations with My Father*, *Brooklyn Boy*, *Bad Jews* に見られるユダヤ人のアイデンティティー
- 山口 乃絵 19世紀後半から20世紀にかけて New York のファッション産業の変遷と歴史的事象との関連の考察
- 山田 安依 開拓時代、近代、現代の米文学から見る American Dream の意義

儀部 直樹ゼミ

- 阿部 風詩 詩集『草の葉』と第16代大統領リンカーン
- 上村 祐加 ニューヨークにおけるLGBTの歩んできた歴史と現状
- 柴野 祐輔 ナンセンス文学—無意味であるという事の意味—
- 水島 真菜 アーミッシュから見る「よく生きる」とは
- 渡邊 真理 世界にみられるストリートチルドレンの現状と社会背景
- 青山 速太 ジーンズの歴史—労働着から普段着への変移—
- 市川 亜実 *The Catcher in the Rye* を読んで
- 小馬 千春 インドにおける女性差別—結婚—
- 小辻 恋也 『動物農場』論
- 鈴木 佐季 ジョージ・オーウェルの作品にみる恐怖政治と秩序
- 永田 泰啓 現代のことわざの違いから見る文化の違い
- 西森 千晶 アメリカと日本の大学教育システム
- 松澤 孝彦 カズオ・イシグロ『日の名残り』に関する考察

鷺 直仁ゼミ

- 谷口 幸司 J.M.W. Turner
—Changing expressions of light and color—
山本 絵美 イギリス食—good or poor—
小尾 正大 スコットランドの独立機運とイギリス
佐古 栞 What is “general”?
佐々木里紗 お茶を通して見る日英文化
佐藤宗一郎 魔性について
—「宿命の女」が示す男女の相互関係—
原田 晃孝 西洋絵画と神話
藤森 春奈 イギリスの紅茶文化
細野 遥 イギリスの食文化
—「まずい」といわれるイギリス料理—
渡辺花菜華 西洋美術から見る宿命の女—残酷—
伏見 愛 Exploring the myth from arts
—Comparing Greece and Japan—

中地 幸ゼミ

- 石岡 春奈 Alice Walker の *The Color Purple* 研究
飯田 真弓 プリンセスとジェンダー—ディズニー映画の
プリンセスにみる女性像の変遷—
越智加奈英 Identity Crisis of Mixed Raced People and the
Racial Concepts of the 1920s
木曾安佳里 The Bluest Eye における白人至上主義が登場
人物に及ぼす影響
草分 麻里 『アンクル・トムの小屋』における聖書
高野久美香 『アリス』シリーズと『千と千尋の神隠し』
に見る比較文化とジェンダー
能作友加里 トニ・モリスンの『ジャズ』における黒人社会
原崎 果歩 Answered Prayers 上流社会における Truman
Capote の存在
原田 育美 ウォルト・ディズニーにみる人種差別

三浦 幸子ゼミ

- 木村 千秋 Exploring Roles of Dancing in Educational Settings
山田貴賀子 Considering the Effects of Storytelling for
Elementary School Children
伊藤あかね Analyzing an Experienced Teacher's Linguistic
Adjustments in EFL Elementary Classroom
小池 詩子 Considering Denotative and Connotative
Vocabulary Learning
佐藤 愛子 Exploring the Effects of Debate in High School
English Education
柴田 千晴 Considering Ways of Teaching Pronunciation
to Foster Intelligibility of Japanese L2 Learners
of English
永井 みる Effects of Oral Reading in L2 Classroom
福田江里伽 Exploring Teacher Feedback through Classroom
Interaction in Elementary Classroom in Japan
宮野 裕太 Effects of Productive Focus on Form in
Foreign Language Classroom
茂谷 厚 Effects of Process Approach to Writing in
Foreign Language Classroom
吉海 洋美 Considering Effects of Schematic Knowledge
on L2 Listening

- 和賀圭一郎 Exploring Fluency in Speaking in Junior High
School Instruction
東 真穂 Exploring the Causal Factors of Classroom Silence

福島佐江子ゼミ

- 井川 伸子 アイロニーの語用論的分析
木本 沙代 ポライトネス理論の変遷
坂本 里沙 ポライトネスと英語教育
藤原 沙良 日英の謝罪に関する一考察
—対人関係の視点から—
竹内 綾香 関連性理論によるアイロニー表現の分析

西出 公之ゼミ

- 芳賀 充士 グローバル化する国際社会における英語の影響
阿部 航 塾・予備校における英語教育
臼田慎一郎 世界主要都市ホームページの英語について
鈴木 千仁 *NIKKEI ASIAN REVIEW* の語彙分析について
鎌田 彩子 グロービッシュの単語リストの修正提案
小林 昭平 アファーマティブ・アクションの歴史
寺島 敬人 MLB の観客動員数からみるアメリカの都市
の経済格差
濱 誠也 アメリカから見た TPP—そのメリットとデ
メリット—
原田 優 Brian Floca (2013) *Locomotive* の翻訳とその解
説から見る 1860 年代アメリカの鉄道の存在
東 将太朗 エビエタ・ゼルバベルの視点
宮澤祐佳子 大学生の国際協力
宮原 幸希 OECD 諸国の財政再建の事例から見る日本
の財政再建への鍵
守江 巧 Khan Academy 科目指導コーパスに見る語彙
指導の違い

奥脇奈津美ゼミ

- 奥谷 晃匡 The Effects of CLIL Method in EFL Classrooms
in Japan
塩崎 洋太 L2 日本語学習者による「テイル」の習得に
関する研究
青木 洵都 The acquisition of grammar and vocabulary in
L2 Japanese
表 由真 日本人大学生のパーソナルスペースの実態に
関する一考察
菅原 京子 日本語・韓国語における借用語の違いにつ
いての考察
杉本 佑人 Age Effects in SLA
高橋 綾乃 不安尺度から見る英語授業における情意要因
について
高村 杏 The Difference Between Receptive and Productive
Vocabulary Size of Japanese L2 Learners
羽賀絵里子 バイリンガルの言語使用にみられるコードス
イッチングに関する考察
東川 周平 小中連携のための小学校英語における文字指
導のあり方
前川 未来 The difference of mother's talk between American
and Japanese

溝口 慎也	言語相対性仮説からみえる言語が文化に与える影響
山野邊桃子	Considering the Impact of Mothers' Speech on First Language Acquisition
山崎恵利佳	The Effects of Incidental Vocabulary Learning Through Reading With Glosses

今井 隆ゼミ

増田 宏平	Evolving of Language and Gestual Communication
望月 麻衣	The Language Acquisition of the Infant and its Relations with the Brain
箭野 裕加	Some Aspects of Second Language Acquisition and Language Teaching
山田 尚耀	Bilingual Language Acquisition

Hamish Gillies ゼミ

木下 友華	How Mixed Nationalities Shape Their Identity in Japan
-------	---

ヘシキルイス	What Parents Can Do to Educate Their Children as Bilinguals
渡邊 友貴	How Has the Working Class Changed Since the Second World War in the East End of London?
小林ひろの 坂木早百合	Love, War, and Culture through Virginia Woolf What Image of British People Do Japanese People Have?
佐々木璃菜	The Influence of Harry Potter on Japanese People
棚田 真理	Establishing a Self-Access Language Learning Center : The Learner and Her Needs
寺山 裕樹	Reading Strategy in Terms of Reading Comprehension and Incidental Vocabulary Learning
間宮 慧太	Representation of London through the Cockney Dialect
山口初乃香	Suggestions for Further Incorporation of Nursery Rhymes into the Elementary School English Curriculum in Japan

社会学科 平成26年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池信輝ゼミ

大石 恒平	団塊の世代から考える戦後人口史
大西 貴之	東京オリンピックとオリンピック効果の地方への波及
小林 春輝	戦間期の海軍軍縮条約—その意義と限界—
齋藤 敬太	柏崎刈羽原子力発電所と柏崎市財政
嶋崎 春花	日本と戦争—国民の戦争観と政情から—
鶴田裕一郎	日露戦争から見る現代日本
中込 涼	戦後の日米外交と安倍政権の安全保障政策
長屋 孔明	日中歴史教科書問題
梨和 俊樹	創価学会の政教分離に対する検討と今後の自公連立政権に対する考察
原田 将吾	田中内閣における日中国交正常化と台湾問題
百田 隆志	自民党長期政権の理由
森 勇太	日本海軍の軍艦の戦果

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

小倉 真輝	行為の理由と因果関係 —行為の理由は行為の原因足りうるか—
北沢あやめ	出生前診断による「命の選択」は倫理的に許されるか
後藤 優真	終末期医療における尊厳死
藤川 里恵	ハウジングプアとは何か —現代の貧困を考える—

生涯学習論 畑 潤ゼミ

道合 敦	高齢社会における学習のあり方についての考察—地域の取り組みを中心に—
菊池 萌	遠野市の地域文化とまちづくり—「語り」の継承意義と震災復興支援の視点から—
染葉めぐみ	地方自治体における社会教育・生涯学習に関する研究—島田修一の社会教育論から学ぶ—
今野 舜	「学力」のとらえ方に関する一考察 —大田堯の著作を中心に—
川波 寿樹	戦後教育における能力主義の現代性とは何か—その「現実」と「理想」の相克を問う—
郷 健太	個人の学習と教育—学ぶ機会と教育の在り方—
松田 貴春	「大衆化」した大学において教養の探究はどのような役割を果たすのか
井垣 隼弥	児童養護施設 —厳しい環境を生きる子どもたちと職員—
藤田 純祈	地域における教育—学童保育の視点から—

企業経営・労働とジェンダー 野畑眞理子ゼミ

白川 綾子	同性愛者と「労働」の社会学 —現状と、企業との関係性の展望—
山口 友輔	日本的経営とキャリア教育
岩間 正樹	男性のワークライフバランス
小倉健太郎	日本のワーク・ライフ・バランスにおける考察—日本の男性の育児休業を中心に—
小林 成実	女性の貧困—貧困母子世帯を中心とした考察—
鈴木 敬人	女性の社会進出を抑制する諸要因

高江洲陽輔 日本における社会保障の類型と課題—国際比較、選挙・制度の変遷を通じた若干の考察—
渡邊晋太郎 男女間賃金格差の現状と課題

日本経済論 秋保 親成ゼミ

井川 明音 アイドルと日本経済—アイドルの歴史と日本経済の変動から関係性を考察する—
磯野 一樹 ローカル電車が地域社会にもたらす効果—銚子電気鉄道の事例をもとに—
内田 優姫 経済的不平等による教育格差への取り組み—フィンランドの政策から考える—
大島 顕史 長時間労働問題の解決におけるホワイトカラーエグゼンプション制度の有効性について
尾崎 圭亮 日本小売業の現状とこれから
車 友香梨 若年女性のやせ願望と摂食障害
鈴木奈津美 社会福祉制度から見える貧困からの脱却と対策
宋 恩美 東北アジアがこれから進めていく方向
高稲 紘子 少子高齢化と移民政策
布澤 慶多 長崎県における基幹産業としての造船業を収益性から考える
前田 瑞樹 アベノミクス—第一の矢—金融緩和政策で国民生活は改善されるのか—
森下 広大 障害者のいる家族の貧困—障害年金を中心に—
山野 奈央 アパレルと経済

憲法 横田 カゼミ

荷見 佳祐 表現の自由の価値論からみる権利保障
飯島 昂基 一自己統治と自己実現の価値
堀口 成 消費税増税に伴う社会の変動と憲法原理
現在日本の民主主義の検討と今後求められる民主主義モデル—日本国憲法原理との関連で
佐野 美咲 憲法 25 条生存権から考える生活保護社会保障制度の在り方
安藤由々子 生存権と労働について
—労働者の自立と自己決定を問う
平良麻里愛 世界平和実現のための日本国憲法第 9 条のあるべき姿の検討
土橋加奈未 生活保護法改正による問題点と現代日本の貧困—憲法 25 条からの考察
高橋 彬 生活弱者の権利と未来—「排除しない社会」の構築を憲法原理から考える
二村 彩 ヘイトスピーチについて
—憲法 21 条から考える
生田 智也 憲法 9 条と自衛権—解釈改憲による集団的自衛権容認を批判する
長谷川雄紀 憲法第 25 条生存権論の今日的課題
—高齢者問題からみる社会保障の在り方
加藤 隆太 憲法 25 条から見る生活保護法のあり方
須和部広大 憲法 25 条、13 条と子どもの貧困
—子どもの貧困からみる社会保障制度の考察

社会法 常森 裕介ゼミ

草間 仁美 ブラック企業と若者の労働

寺田 陸人 労働問題対策のための「新日本型ワークシェアリング」についての考察
飯野 静香 現代日本における過労死と労働環境
森田 光 現代における若者の雇用問題
内藤 梨沙 生活保護制度の機能不全と背景にある貧困
広瀬 紗希 若者の貧困と就労支援
岩井 亮佑 若者の労働と社会保障
新舎 奈々 日本における少年司法制度の現状と課題
望月 優太 ワーキングプアと貧困
山本 智之 超高齢社会における介護保険制度の課題
武藤 優 認知症高齢者と地域包括ケアシステム
後藤 弘樹 年金制度が抱える世代間格差

現代社会論 進藤 兵ゼミ

下藺 崇 日本の安全保障
—集団的自衛権との関係について—
中村 廉 大学生における新卒一括採用の変革
—新卒にこだわらない雇用システムの変革を目指して—
一木 翔 なぜ日本の首相の任期は短いのか
勝又 靖正 ベヴァリッジ報告からみるニューリベラリズムについて
長田 真帆 日本における茶の歴史と未来
—2020 年へ向けた茶の挑戦—
武石美有紀 日本における自然エネルギーの発展
—エネルギー自給、環境問題の視点から自然エネルギーの必要性を考える—
田中 優衣 日本における動物の殺処分問題
—諸外国の事例をもとに考える—
中島 光貴 非営利組織の収入戦略
—いかにして寄付金を集めるか—
中西 功大 ネット右翼の研究
吉田 章朗 精神疾患保有者の貧困に対する生活保護水準を用いた研究

地方自治論 松岡 清志ゼミ

荻窪 純平 富士山の世界文化遺産登録と富士北麓地域の活性化
加藤 優矢 新幹線開通による地域への影響と変化
川口 恭平 本当の豊かさとは
岸下 隼人 プロスポーツクラブによる地域活性化の可能性と方策
小長谷景太 大規模商業施設と商店街の共存
佐久間瑞稀 地域住民の活性化に対する関心と地域活性化との関連性
高橋 圭佑 岩手県の観光—持続と発展—
松舘 卓磨 大学生の地域参加推進の方策
—都留文科大学生の意識調査を例に—
三改木理里 東海道沿いの宿場町の発展と、これからの活性化について
依田 慎也 市川三郷町から見る平成の大合併とこれからの合併自治体のあり方
米田 涼 北陸新幹線開通に伴っての、富山県氷見市の波及的、地域活性化の課題と展望
渡邊 美香 産学官民による協働の組織とそのあり方—都留市活性化コンソーシアム Re:Tsuru を例に—

横瀬 翔子 再生可能エネルギーによるクリーンなまちづくり

環境・コミュニティ創造専攻

環境社会学 平林 祐子ゼミ

伊藤 里帆 ひきこもり支援における連携の課題
—名古屋市の事例として—
河上 亜希 中山間地域での地域活性化と受け入れ体制のあり方—徳島県神山町を事例に—
小林 愛実 山梨県における市町村での鳥獣害対策の現状と課題
樋泉 健太 学校林活動による森林保全の意義と課題
—上野原小学校、谷村第一小学校、都留文科大学附属小学校を事例に—
中川 雄太 スマートフォンの普及・利用による情報通信機器および端末に係る消費電力量への影響について
浜野 勇輔 金沢市の自主防災組織が抱える問題点についての考察

環境教育 増田 直弘ゼミ

山本由樹恵 環境演劇ワークショップの可能性
一場 雄樹 自然体験活動指導者の関わりが参加者に与える影響
大和田裕貴 東日本大震災における豊間・薄磯・沼の内地区の聞き取り調査
角川 功樹 北海道におけるファームインの現状と産業としての将来的期待
鎌田 瑞菜 不登校の社会的支援—ふじみ野市における不登校の社会的支援事業提案—
桐原 孝文 水俣病を題材とした公害教育授業実践のために
近藤 和弥 万足平の猪垣からみる現存する猪垣の有用性
田中 貴大 体罰正当化の論理
豊田 健悟 稲むらの火から学ぶ学校防災教育
—和歌山県広川町の事例—
長谷川航大 キウイフルーツを日本へ
—澤登芳とキウイフルーツ—
日原加奈子 中国残留婦人の記録—少女のたどった道—
眞邊 奏 屋久島におけるエコツーリズム
—その現状と課題—

地域環境計画 渡辺 豊博ゼミ

分部 泰成 校歌から紐解く富士山のメッセージ性
—富士山と人の関わり方—
吉野 大地 都留市の地域資源の発見と活用の提言
穂山 大輔 産学官民協働による中心市街地活性化への実現と可能性
飯田 聖弥 集落としての散居村の現状と今後の方向性
—富山県砺波市砺波平野を例として—
井口 耕兵 焼津市の環境教育—地域文化から人を育てる—
大竹 雄太 富士山における観光と環境の共生
—長野県上高地と比較して—

大名門佑紀 持続可能な地域づくり
—地産地消の考察からの地域づくりの提案—
桂川 靖正 下呂市観光計画の考察と観光業活性の可能性
川崎 豪也 富士山—多様な観光の資源のあり方—
桑木晃太郎 エヴァンゲリオンを活用した箱根の観光の可能性
高木 秀一 福島県いわき市伝統芸能を迫る
—震災前と震災後を比較して—
田中 智大 世界の寄付体制とこれからの日本の寄付文化の可能性について—京都府福知山市「福知山市千年の森ふるさと基金」を事例に挙げて—
鄧 彪 中国アジアにおける日本の環境協力—技術による環境ビジネスの可能性を考える—
松原 慶彦 地域活性化の起爆剤としてのジオパークのあり方
山田 菜々 地域資源を活かす方法と知恵
—河口湖を事例として—

地域社会論 田中 里美ゼミ

重本 香純 バリアフリー観光の推進は地域づくりにどのような影響をもたらしたのか
石川 正洋 東日本大震災被災地域における高齢者支援のあり方とは—福島県相馬市の取り組みを事例に考える—
伊藤 嶺 アニメツーリズムによる地域活性化の可能性
稲垣ほのか 合併・非合併自治体のたどった10年
—長野県上田市と長野県青木村を事例に—
今井 郁孝 高柳町のまちおこし—これまでの取り組みをふり返り、これからの可能性を考える—
大久保彩香 東日本大震災における震災遺構の抱える課題と可能性とは何か—震災の記憶や教訓を伝えるための取り組み—
土橋 宏司 地域農業は地域にどう役立つのか
—都留市の場合—
暖 祐紀美 少年犯罪と現代の病理
原 大貴 北陸新幹線飯山駅開業に向けた飯山市の観光まちづくり
原 望 おいしがねから見る地域社会の変化と信仰のありかた
水野 孝英 これからの地域のあり方に関する提言
—都留市における事例を通して—
南出 尚也 放課後子ども教室の現状と課題—山梨県富士吉田市の放課後子ども教室の事例を中心に—
宗村 佑也 富士宮やきそばを中心とするまちづくりはいかにして成功・継続したのか—社会的ネットワークからみるまちづくりの成功例—

地域経済論 千葉 立也ゼミ

梅津 祐里 市民参加演劇による広がりとの継続的活動への展開—静岡県事例から—
大嶋 滯奈 地域の文化活動を支えるネットワークの構築—東京都三鷹市における文庫活動を事例に—
荻原 菜摘 フィルムコミッション活動とその地域づくりとしての意義—静岡県内の事例から—
清水けい子 地域における食育活動のつながりと意義の考察—長野県長野地域を事例に—

西山 紗智	都市の中の緑地「まちの里山」づくりと小学校の里山学習の意義 —世田谷区成城三丁目緑地を事例に—
矢崎 智彦	いすみ鉄道の観光路線化による地域社会への変化と影響
山岸 朋弘	アニメ聖地巡礼による地方小規模温泉街の活性化—金沢・湯桶温泉街の事例—
渡辺 理奈	価値の見直しによる特産品開発と地域の変化 —北海道函館市のがごめ昆布を事例に—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

岩佐 志保	ボウリングの研究 —アダプテッドスポーツとしてのボウリングと補助器具の問題点に対する考察—
奥園 大介	観光地と地元商店街の連携に関する研究 —北九州門司区・栄町銀天街を事例として—
斎藤 源太 斎藤 秀平	G P S を用いた河川の土地利用実態調査 クライナガルテンにおけるグリーン・ツーリズム—南アルプスクライナガルテンの事例から—
嶋 林太郎	「空き家」問題に対する市民の取り組みとその可能性について—茨城県龍ヶ崎市における実地調査を通じて—

高見 陽介 土屋 聡	コーヒーチェーン店のドミナント戦略の分析 路上店舗・オープンカフェによるオープンスペースの活用と地域活性化の可能性
中澤 沙帆	ゆるキャラに関する研究 —「ゆるキャラG P 2013」出場キャラクターから見るゆるキャラの実態—
松尾 知香	北九州市立国際友好記念図書館の建設経緯について
森山 幸汰	富山市におけるまちなか居住に関する考察 —コンパクトシティ政策との連動性—
伊藤 皓一	まちづくりにおける道の駅が果たす役割についての研究

農山村再生論 林 公則ゼミ

田中 希望	持続可能な社会に向けた馬搬の可能性—岩手県遠野市を事例として—
茂木 彩歌	「道の駅」における農産物直売所の意義 —「道の駅 雷電くるみの里」を事例として—
辻本 美緒	くしはらへボ愛好会の活動の変化とへボに関する文化の伝搬

比較文化学科 平成26年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

五十嵐 碧	戦後責任の日独比較
梶原 千紘	終戦記念ドラマは何を伝えるか
小林 紗弥	平頂山事件
田立 友里	安倍政権と「教育再生」
田中 昂友	賠償と世論
千葉 拓馬	自衛隊海外派遣と小沢一郎「普通の国」論
露崎 藍	尖閣諸島問題
出口ほのか	国際法から見る南京事件の捕虜虐殺
長野 瑠衣	メディアからみた同時多発テロ
原田 一沙	南京事件の際に起きた性暴力事件の考察
眞玉橋沙紀	沖縄戦における「集団自決」
森田 峻	あるパイロットの肖像
山田 英匠	日韓基本条約の合法性と請求権
劉 文慧	被害者証言から見た重慶大爆撃—被害実態から重慶大爆撃の違法性を考える—

内山 史子ゼミ

小泉 真紀	タイにおけるコメ政策の変遷とコメ農家・農村の展望
有村 美咲	東南アジア諸国の言語教育政策について
小林 麻衣	ユドヨノ政権下のインドネシア経済政策
関 征寛	フィリピンの公教育における宗教教育制度
滝口 和奈	フィリピンの児童労働
林 寛人	仏像からみるタイの時代・宗教・美術

傳 玲	シンガポールにおける華人のアイデンティティ
方美 蘭	シンガポール華人の言語とアイデンティティ
吉田めぐみ	東南アジアにおける売春労働
和田 天音	タイ王国伝統音楽の歴史
日當 晶子	インドネシアの環境問題
福田 円香	シングリッシュとシンガポール人のアイデンティティ

大辻千恵子ゼミ

益子 紗采	サッカーを通して見る日韓交流 —歴史と報道により“宿敵”と化した両国の未来を考える—
橋本 竜一	再生可能エネルギー利用による地域分散型の発電システムへの転換 —ドイツと日本の取り組みと課題—
本田 拓希	戦後日本とアメリカにおける記憶と忘却 —アジア・太平洋戦争—
天野 一麻	シンガポールと英語公用語政策 —経済大国への道—
増田奈々実	飢餓撲滅へ向けた国際協力のあり方—子どもたちの未来のために、今、できること—
日野太一朗	北方領土問題はどうか解決してゆくべきか —日本、ロシアの国家と島民の視点から—

大森 一輝ゼミ

- 荒川 七重 英語教育—早期化の実態と今すべきこと—
 有泉 音々 同性愛の実態
 宇田川敬之 サッカー界における人種差別
 大平 愛里 二重国籍—日本で認められるべきか—
 柏木 結妃 観光立国を目指す日本の理想と現実
 北澤 佳織 日本における黒人差別
 谷川 友樹 近代アメリカにおける新移民の流入
 —エスニック社会の形成をビジネスの面で考
 える—
 塚本 瑞樹 日本の移民増加に向けて
 —他国の事例も踏まえて—
 松下 沙樹 アメリカ合衆国における教育格差と貧困
 —Teach for America に学ぶ教育改革—
 水尾 健斗 ファーストフードからアメリカの貧困層の健
 康を考える
 —私の提案する新ファーストフード—
 水野奈々実 戦争加害とどう向きあうか
 —「慰安婦」問題に言及して—
 柳沢 直輝 帰化選手によるスポーツ界の変化
 酒井 尚 Google の脅威
 —インターネットにおける安全保護—

重富 恵子ゼミ

- 李 在 夏 多文化共生社会発展のための人権中心の多文
 化教育
 上村 慈 現代社会で生き抜くために必要な学びを
 —中等学校・高等学校教育のあり方について
 の考察—
 大石 佳奈 社会的排除を通じてみる子どもの貧困
 垣本礼於奈 石垣島の環境破壊から考える観光の在り方
 工藤 里菜 労働組合の代表性に関する考察
 —インドネシアの労働組合の事例から—
 小松 円 「性の多様性教育」に関する考察—HIV= ヒ
 ト免疫不全ウイルス感染の問題と男性同性
 愛者の人権の観点から—
 高橋 恵 災害現場における社会調査の意味
 塚田真里奈 「民工荒」問題から見る中国農民工の待遇改
 善
 西塚 千尋 日本林業再生への考察
 —山形県金山町の金山林業の事例から—
 橋本 真澄 施設内高齢者虐待はなぜ起こるのか—介護職
 員の労働実態と心理的側面に着目して—

鳥居 明雄ゼミ

- 池田 優香 神社における結界
 石川 文音 日本と世界の異類婚姻譚
 菊池 祐斗 日本の葬儀の現状と今後の展望
 栗山 千央 なぜ日本マンガが世界中で読まれるか
 中澤 有斗 神話の道具論
 中込 翔 現代に生きる妖怪
 永田 成望 昔話から見る人々の成り立ち
 望月 昂樹 月への民族意識
 湯本奈々佳 天体民俗学から見た人と星の関わり

福田 誠治ゼミ

- 安達 千晶 スウェーデンに学ぶ「持続可能な社会」
 草谷 茉穂 世界で愛されるアパレル企業になるには
 桑原 摩帆 教科書・教材から見る世界の教育
 志村 歩 幸福度調査から見る幸福のあり方
 田嶋 絢子 子どもの成長—教育課程と絵本の役割—
 中川 由梨 サンタクロースの文化
 西山 和希 幸福の国デンマーク
 福田 沙織 宗教への意識と巡礼路
 藤綱 淳 日本とデンマークにおける大学入試の比較
 —「ゆとり」ある大学入試とは—
 三浦 亜弓 人々を豊かにする北欧の暮らし
 蓑輪 望 北欧デザインの魅力—なぜ北欧デザインに日
 本人は惹かれるのか—
 森 淳平 日本のギャンブルと北欧のギャンブル
 —パチンコの受け入れられ方—

分田 順子ゼミ

- 柄澤美有紀 日本の農村における国際結婚と移住女性
 佐藤 朱音 中国女性学を拓く—李小江 vs 婦女連—
 高橋 経子 アイドルという商品化された理想の女性像
 —AKB48を中心として—
 山崎 愛莉 偏在するホモフォビア—東京都立府中青年の
 家の同性愛差別事件を例として—
 越智 璃良 女性国際戦犯法廷
 —日本と世界の報道を比較する—
 高橋 舞 日本で学ぶ外国人の子どもたちへの支援を考
 える—当事者団体を中心に—
 谷口 康子 なぜ人々はヘイト・スピーチに走るのか
 —在特会・ネット空間・規制の不在—
 出坂 温子 日本と他国の第三国定住制度を比較する
 —難民への初期支援とその後の支援ネット
 ワークを中心に—
 松嶋 優希 東京ディズニーランドの企業文化を問う
 —ホスピタリティの演出を中心に—
 安田 和代 卵子凍結という選択肢
 —晩婚化との関係を中心に—

邊 英浩ゼミ

- 山本 和奈 慰安婦問題の現在
 林 藍 現代の日本における若者の砂粒化
 —若者はなぜ孤独なのか—
 小林 奈月 こと(言・事)の現象学
 伊禮 美里 沖縄における基地問題
 高木 美月 アンネの日記 日記から読み解くアンネ・フ
 ランクの姿
 大畑 慶恭 現代の貧困—ハリケーンカトリナと阪神淡
 路大震災を例に—
 杉野 里紗 ユダヤ世界—聖書と共に生きる民族—

牧田 東一(岸 清香)ゼミ

- 石井 遥香 少女マンガのヒロイン表象—『美少女戦士
 セーラームーン』における女性作家間での
 フェミニズムの継承と深化—

石澤 千紘	変化する観光都市の中で生きる商店街 —信州善光寺表参道を事例に—
坂本 夕佳	フィルムツーリズムの持続性—ニュージューラ ンド映画のロードオブザリングを事例に—
菅野美桜子	名画と観客の距離—日蘭のミュージアムの比 較を通してみるミュージアムの市民性—
杉浦 悠太	NGOの開発援助は貧困削減にどのように貢 献しているのか—ハンガー・フリー・ワール ドによるウガンダ支援を例に—
杉本 沙織	エコツアーガイドは環境教育を担っているの か—小笠原諸島を事例にして—
宮崎 舞	現代アートの地域活性化効果—小豆島におけ る瀬戸内国際芸術祭とその後—

水野 光朗ゼミ

秋本 淳	現代日本の大衆文化について
小坂 直生	植民地期朝鮮の「開発」と「収奪」
石部 文香	歌舞伎のソフトパワー性 —クールジャパンから探る安全保障—
金田準之介	水掛け論 忘却の水麦

宮澤 星	小売業の中国進出について
佐藤 暁紀	メディアとジェンダー

山本 芳美ゼミ

山田 里美	世界遺産登録以後の富士山観光の現状とエコ ツーリズムへの取り組み
石田 和子	日本人と温泉—入浴観念と利用目的の変化—
喜村 雄太	地域振興における文化財の利用 —三重県鳥羽市の事例を中心に—
島田 友弥	絵本の歴史における「こどものとも」 —その役割と幼児教育の可能性—
築地 貴弘	甲府の街と甲州印伝
長沼 沙苗	ジーンズを通して探る「女性らしさ」とは —1970年代のジーパン論争の検討を中心に—
中村 駿介	活字か手書きか—書道の観点からみるワーブ ロをめぐる論争—
皆川 文彦	ヤクザの震災援助と報道
百次あんな	占いから見る現代の若者の孤立化 —相談サイトと比較して—

平成26年度 研究論文提出一覧

文学専攻科

鶴田 清司 先生

佐々木千尋	集団読み聞かせを国語教育に生かすには
末木 翔大	折り紙を用いた算数教育
根本 溪太	授業における教師の立場の再検討 —佐藤学と市川伸一の学習論の比較—
早坂 駿吾	生活綴方教育の可能性
水野 健吾	新自由主義の中での学校と教育

平成26年度 修士論文提出一覧

国文学専攻

阿毛 久芳 先生

柄澤 尚美 片山恭一作品論
—『気配』から『遠ざかる家』まで—

社会学地域社会研究専攻

進藤 兵 先生

王 維穎 中国における公的年金制度と施設養老にかん
する考察—福祉多元論をふまえた中日比較
の視点から—

英語英米文学専攻

竹島 達也 先生

黒田 隆子 Arthur Miller's Philosophy and His Works
天口佑希子 The Jewish American's Homeland : A Study of
Jewish American Drama and Their Identity

太平 栄子 先生

栗賀 暁 Blankness of National Movement and Aziz'
Transformation in A Passage to India

中地 幸 先生

高田 真明 A Trailblazer of the "True Civilization" in Shinshu
: Kigenji Iguchi and His Life

三浦 幸子 先生

長又みらの An Analysis of L2 Learners' Use of Communication
Strategies in Conversational Interaction

儀部 直樹 先生

三沢 奈央 Toni Morrison's Feminist Perspectives in The
Bluest Eye : An Analysis of the Sentiments of
Characters

比較文化専攻

分田 順子 先生

香西 幸 ワーカーズ・コレクティブにおける「経済的
自立」という課題
—「凡」の挑戦から見えるもの—

大森 一輝 先生

篠原 双葉 共同教科書 Learning Each Other's Historical
Narrative の考察
—イスラエルとパレスチナの対話の試み—
畑山 ちえ メガスポーツイベントによる開発問題
— 2010 年サッカーワールドカップ南アフリ
カ大会を事例に—

講演会だより

2014 年度国文学科秋季講演会

『古典詩歌を生き生きと楽しく読もう』

— 百人一首と現代詩のあいだ —

(11 月 12 日 (水) 開催)



会場の様子

講演会当日、学生たちに混じって、場所を尋ねながら会場へと向かう一般の方々を見かけました。ほぼ満員の聴衆のなかにも、地域の方とおぼしい人たちがちらほら。講師の小池先生への期待の高さ、演題「古典詩歌を生き生きと楽しく読もう—百人一首と現代詩のあいだ—」への興味の強さがうかがわれました。講演はそうした期待にたがわぬ、じつに魅力的なものでした。

前半では、百人一首から「村雨の」(寂蓮)、「さびしさに」(良暹)、「白露に」(朝康)、「名にし負はば」(定方)、そして「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」(友則)の五首がとりあげられ、各歌には、講師による現代詩の翻案があわせて示

されました。たとえば、友則の「ひさかたの」歌には、

ひさかたの
ひかりにあふれる のど
かな春
ものみな ゆったりと
まどろむなか
桜ばかりが ちりいそぐ
静心もなく ちりいそぐ

というように。「詩」や「歌」にとって〈空白〉が大切な意味をもっていると語られたことが印象に残ります。上記の詩においても行替えやブランクが重要な要素です。読者諸賢には、行替えブランクをそのままにしつつ、できれば当日示された縦書きの形に書き写して味わっていただきたいと思います。短歌にとっては、五、七、五、七、七、各句の間が重要な空白だということ

です。

講演の後半では、萩原朔太郎、西脇順三郎、立原道造、レイモンド・カヴァー(村上春樹訳)の詩が1篇ずつとりあげられました。ことばの連なりが、どのようなときに「詩」となるのか、が諸点から明かされていきました。情報を過不足なく伝えることばは、それなりの機能をもっているけれども、そのままでは「詩」にはならない。「詩」になるには、むしろひき算が必要だというのは、いかにも作家の創作体験から出た言という感で、心ひかれました。

詳しい内容は、本学国語国文学会の会報に掲載されますので、そちらをご参照ください。

(国文学科 教授 佐藤明浩)

講師紹介



小池 昌代 (こいけ・まさよ)

詩人・小説家。

1959年、東京都生まれ。津田塾大学国際関係学科卒。2009年から2012年まで、立教大学文学部文学科文芸・思想専修特任教授。

主な詩集に『もっとも官能的な部屋』(2000年・高見順賞)、『小池昌代詩集〈現代詩文庫〉』(2003年)、『ババ、バサラ、サラバ』(2008年・小野十三郎賞)、インドへの旅から生まれた『コルカタ』(2010年・萩原朔太郎賞)。主な小説に『タタド』(2007年・表題作で川端康成文学賞)、『転生回遊女』(2009年)、『弦と響』(2011年)、『厩橋』(2012年)、『たまもの』(2014年・泉鏡花文学賞)など。エッセイ集に『屋上への誘惑』(2001年・講談社エッセイ賞)、『文字の導火線』(2011年)、『産屋』(2013年)などがある。

講演会だより

2014年度 地域社会学会・後期講演会 李東勲先生

『被災地では学生にどのような
役割を求めているのか?』

今回の地域社会学会は李東勲先生を講師にお迎えし「後期講演会」を開催しました。李先生は東日本大震災の被災地石巻市にある石巻専修大学の准教授です。被災当時から現在まで、被災地・被災者の目線から被災地支援の研究や活動をされています。その中で先生が感じられたことを「学生に求められる役割」というテーマでお話をいただきました。

李先生も被災者であり、津波が自宅を襲い、貴重な書籍や思いで多き大切な物を失いました。しかし、そんな悲しい現実の中でも先生は他の被災者の厳しい現状に目を向けて、避難所で居場所を失った高齢者支援の問題や被災地の支援ニーズに合わせ臨機応変な支援など、一人一人の心に視点を置いた人間的な支援のあり方の重要性に気付いたといいます。

李先生のご専門は経営学で

あり、被災地でのビジネスやマーケティングについても、ご教授いただきました。ビジネスの鍵を握るのは的確な顧客ニーズの情報収集力であり、顧客に寄り添った現実的な情報を得るための行為こそがマーケティングです。これは「顧客」を「被災者」に置き換えれば、被災地支援のマーケティングに繋がります。被災地で何が求められているのか、それを正確に把握しなければ適切な支援はできない。「作ったものを売るのではなく、売れるものを作る」という一言に深い感銘を受けました。

先生はそうしたお話を踏まえ、私たち学生へのメッセージとして起業を説かれました。被災地には優秀な若い人材が多くいますが、就職先がないということで、多くが地元を離れ大都市へ出て行ってしまう。その学生たちに理由を聞くと「就職先があれ



被災地の現実的な実態と学生への期待を熱く語る李講師

ば地元に残りたい」という意見が圧倒的であったといいます。就職先を探すのではなく、自分自身が地域で求められている役割を担い、新しい仕事を始めて欲しいと李先生は訴えました。

これは被災地だけに限りません。私たち学生は就職先を探し、「地元にはないから」とすぐ故郷を離れてしまします。しかし、地元の中にも仕事に繋がるニーズは多く隠れています。かつてのように大きな企業に就職することが必ずしも最良とされなくなった今、これは非常に革新的なご意見でした。

東日本大震災から間もなく4年が経ちます。震災で得られた、そして今も得られている教訓の中には我々学生への多くのメッセージが込められていると思います。それに気付く機会を、李先生に頂きました。

最後になりましたが講演いただいた李先生、当日お越しいただいた聴講者の皆様、ご協力いただいた関係者の皆様へ深く感謝申し上げます。

(社会学科2年 太田裕也)

講師紹介



李 東勲 (イ・ドンフン)

石巻専修大学准教授。経営学博士。専修大学経営学部、千葉商科大学商経学部、関東学院大学経済学部にて兼任講師、専修大学社会知性開発センター客員研究員を経て2008年より石巻専修大学経営学部にて准教授を務める。著書に『経営目的から小零細小売業の課題』（専修大学出版局）。

講演会だより

比較文化学科講演会 サヘル・ローズさん

『女優サヘル・ローズさんと考える
多文化“ニッポン”』

11月8日（土）に女優のサヘル・ローズさんをお招きし、「女優サヘル・ローズさんと考える多文化“ニッポン”」の題目で講演会を行いました。サヘル・ローズさんはイラン出身の女優です。イラン・イラク戦争により住んでいた町が空爆され、家族を全て亡くされましたが、ボランティアの女学生フローラさんによって救出、その後引き取られ1993年来日されました。現在はNHK「探検バクモン」、日テレ「ネブ&イモトの世界番付」などのテレビ番組や映画を中心に活躍されています。

今回は多国籍になりつつある日本の文化や生活に触れ感じたことをお話しいたいただき、イランの人々とその生活やイスラムの女性文化についてもお話を伺いました。

講演ではサヘルさんが来日したばかりの頃のお話やフローラさんと共に苦しい過去を乗り越えられたことなどをお話いただきました。中東出身だからという理由でいじめに遭い、お金がなく、満足に食事も食べられない状況が続いた時期もあったという話を聞き、多文化共生の難しさを感じました。「そんなつらい状況の中でも、助けてくれた人も日本人だった、だから日本の方々には本当に感謝している」というサヘルさんの言葉にとっても胸が熱くなりました。

質疑応答ではイスラム女性が身に着けているヘジャブについてのお話を伺い、最近では政府に対しての批判の意味で身に着けなかったり、ファッション化が進み色や柄の入ったものを身に着ける人



講演会の様子

がいたり、宗教にとらわれない多目的な使い方をしている女性が多いという内容でした。ヘジャブに対しては宗教が大きく関わり、自由を制限されているイメージを持っていたため大変驚きました。

「文化が違うからこそ、相手を知ろうとすることが大事」というサヘルさんの言葉はつらい経験をしながらも、たくさんの日本人に助けられた過去から、いつも感謝の気持ちを持ち活躍されているサヘルさんの強い気持ちが伝わってきました。

今回の講演は外国や文化交流に興味のある学生にとって、多文化共生について比較文化の視点から考える非常に貴重な講演になったと思います。

最後になりましたが、今回講演をしていただいたサヘル・ローズさん、当日ご来場いただいた聴講者の方々、準備・運営にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

（比較文化学科2年
高橋麻奈佳）

講師紹介



サヘル・ローズ

1985年イラン生まれの女優。1993年来日。東海大学卒業、東京アニメーションカレッジ専門学校声優学科アクターズコース卒業。現在、NHK「探検バクモン」、日テレ「ネブ&イモトの世界番付」、などの番組で活躍中。著書に『戦場から女優へ』文藝春秋（2009年）がある。

講演会だより

比較文化学科講演会 15代目沈壽官さん

『薩摩焼 —400年の伝統—』



講演の様子

2014年度比較文化学会主催講演会の第2回目を12月3日(水)に15代目沈壽官さん(以下15代目)をお招きして行った。講師は、鹿児島県の伝統工芸品である薩摩焼(やきものの名称)を作っている窯元の名門「沈壽官窯」の15代目である。最初に、NHK日曜美術館で以前放送された「風濤(ふうとう)を越えて 薩摩焼と生きた400年」の映像上映が行われた。その後の講演では、やきものの簡単な歴史からお話して頂き、他県の陶磁器の話、また、薩摩焼誕生から沈壽官家のルーツを話していただいた。

薩摩焼の歴史は、400年前に遡る。1598年、文禄・慶長の役の際、豊臣秀吉の命により島津義弘

(薩摩藩主)が韓国の南原(ナモン)から朝鮮人陶工らを連れ帰った。その中に沈壽官家の初代がいた。つまり、15代目の先祖は朝鮮人ということになる。

15代目は、家業を継ぐことを幼い頃から否応なく意識してきた。朝鮮人蔑視の歴史があり、若い時から誰かに先を決められるというのは窮屈なものである。しかし、父も祖父も郷土に帰ってきて家を継いだ。だから、家を継がないとは簡単には言えなかったそうだ。私たち世代で果たしてそんな風に考えられるだろうか。

司馬遼太郎の名作「故郷忘じがたく候」という小説がある。実はその主人公が15代目の父である14代目だ。その縁で司馬先生に結婚式の仲人をしてもらい、以来交流が続いたそうだ。講演会の最後にその司馬先生から15代目に宛てた手紙の朗読をしていただいた。その一文が印象的だったので紹介したい。

「民族というのは、さまつなものです。どこかの共有個体でしか

なく、所属ではありません。(中略)、文化、環境、自然、風土が違うだけで血ではありません。今の日本人に必要なのはトランスネーション(先生の造語)です。韓国、中国人の気持ちがわかる、同時に強く日本人であるということです。あなたの父君はトランスネーションの人です。面はゆいですが、小生も年少の頃からそう心がけて、自分を一個の人類に仕上げたつもりです。真の愛国はトランスネーションの中に生まれます」。

15代目は朗読後に「自分はそういう朝鮮の歴史を背負っている。これは在日の人もそうかもしれないが、あなたはあなたとして、環境、国境を越えて本当に通用する人がどうか大切ではないでしょうか」と私たちに問いかけた。そして「司馬先生が言うように若い時から自分で自分を心がけて、一個の人類に仕上げる。そういう心がけが大切です」と続けた。

時にはユーモアも混ぜての笑いありで、場の雰囲気のを和ませながらの講演でありつつも、どこか緊張感の消えない講演会であった。やきものという、普段あまり関わることの分野の中から風土や文化、国際交流などさまざまな面から自分、或いは周りを考えるきっかけになったのではと思う。

(比較文化学科2年
折田有佳里)



沈さんと一緒に

講師紹介



15代目沈壽官(ちんじゅかん)

1959年鹿児島県生まれ。本名、大迫一輝(かずてる)。早稲田大学卒業後本格的に作陶をはじめ、その後、イタリア国立美術陶芸学校卒業。2001年大韓民国ソウル「世界陶磁器EXPO2001」、2002年米国ニューヨーク「ASIA SOCIETY MUSEUM」に出品の他、日本各地にて個展を開催。2010年バリのエトワール美術館にて「歴代沈壽官展」を開催。司馬遼太郎の名作「故郷忘じがたく候」の主人公となっている14代目を父にもつ。

講演会だより

ジェンダー研究プログラム講演会 大橋史恵先生

「中国・行動し表現する女子たちの
新しい『女権主義』」

講演会の様子

2014 年 12 月 3 日、ジェンダープログラム主催の講演会が開催された。講師の先生は、現代中国をフィールドとするジェンダー研究をご専門とされている大橋史恵さんで、論題は、「中国・行動し表現する女子たちの新しい『女権主義』」というものであった。

大橋さんは、まず、現代中国におけるフェミニズム運動の歴史的展開について話された。大橋さんによれば、中国でフェミニズム運動が盛んとなってきたのは、1980 年代からで、当時の改革・開放路線に掉さすかたちで、中国共産党の組織である婦女連と知識人女性、民間の女性たちが適宜連携しつつ声を挙げるようになった。そして 1990 年代に入り、ジェンダー概念がアメリカから導入されることで、さらに盛り上がりを見せ、2000 年代に入ると、男性中心主義を脱構築することを目指す「女性主義」という言葉が

定着するようになった。この「女性主義」の運動は、政治色をなるべく脱色するかたちで「平和」的に女性の権利を拡大していこうという運動であった。

だが、2010 年代に入ると、やや微温的とも言える「女性主義」に対する自己批判として「女権主義」という新たな概念が出てくるようになった。この運動は、〈女性の権利〉をめぐる不平等を徹底的に是正することを求め、時に政治的に先鋭化することも厭わない運動であった。このような動きの中で、夫の妻に対する暴力を告発するため血塗られた花嫁衣装を身にまとい北京の市街を行進したり、上海の地下鉄の車中で女性への暴力廃絶を訴えるフラッシュ・モブと呼ばれるパフォーマンスを行ったりする、「行動派」女子が出現するようになった。

大橋さんのまとめによれば、この新しい「女権主義」の運動は、デモのように大規模なもの

ではなく、また、署名活動や行政訴訟、情報公開請求など合法的な手段によって意思表示を行なうので、当局の摘発の対象になりにくいということがある。また、SNS を使い動画や写真の配信を行なうことで横のつながりを可能にし、複数の都市での同時多発的なパフォーマンスや、国境を越えた女性運動を可能にするという特徴を持つものであった。

大橋さんのお話を拝聴しながら、現代中国の「行動派」女子の〈過激なしたたかさ〉とでも言うべき戦略・戦術に瞠目する思いがした。講演の後、懇親の席が設けられたが、大橋さんの論文をゼミで扱ったという女子学生がやや緊張の面持ちで大橋さんに質問を投げかけ、大橋さんが朗らかに応答されていたのも印象的であった。

(国文学科 講師 菊池有希)

講師紹介



大橋 史恵（おおはし・ふみえ）

早稲田大学アジア太平洋研究科助教

1978 年生まれ。

東京外国語大学中国語学科卒業。同大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（社会学修士）。お茶の水大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了（学術博士）。2012 年 9 月から早稲田大学アジア太平洋研究科助教。同大学にて「アジア地域統合と市民社会」などの科目を担当するかたわら、他大学で「ジェンダー論」などを講義。

主著に『現代中国の移住家事労働者－農村都市関係と再生産労働のジェンダーポリティクス』御茶ノ水書房、2011 年（第 31 回山川菊栄賞受賞）など。

院生時代から今日まで中国各地でのフィールドワークを継続的に実施。その成果の一端を、『女たちの 21 世紀』のコラム「中国フェミの見聞録」に連載中。

講演会だより

平成 26 年度司書・司書教諭課程特別講演
図書館サークル「Libropass」講演

「世界の図書館に行きたくなる話」

年末も押し詰まった 12 月 25 日（クリスマス!）、2 号館 101 教室にて本学非常勤講師で中央大学職員の梅澤貴典氏をお迎えして平成 26 年度司書・司書教諭課程特別講演、図書館サークル「Libropass」講演「世界の図書館に行きたくなる話」が開催された。当日は司書・司書教諭課程の冬集中講義を受講している学生 200 名を中心に市民などが集まり、梅澤氏が見てきた世界の図書館について拝聴した。（発表図書館は別表のとおり）

第 1 部図書館

エジプト：アレクサンドリア図書館
スロヴェニア：リュブリャナ大学図書館
ブータン：ブータン国立図書館

第 2 部図書館

アメリカ：ハーバード大、イリノイ大、MIT
カナダ：クイーンズ大
デンマーク：デンマーク王立図、コペンハーゲン大
ノルウェー：オスロ大
スウェーデン：ルンド大、ウプサラ大、スウェーデン王立図、ストックホルム市図
日本：名大、都留文大
計 9 カ国、16 図書館

第 1 部、第 2 部で 9 カ国 16 図書館を写真とトークにてご紹介いただいた。ブータンのブータン国立図書館は元々日本の援助で JICA の方が設立に携わったり、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの図書館のお洒落さと機能の充実に嫉妬したりしていた。

全編を通じて感じたのは、どの図書館も図書館の目標や目的、役割や意義を具体的に規定していて、その役割のための機能や場所として建設されていることが印象に残った。

日本の図書館は「図書館を建設すること」が目的となり、「隣町に図書館ができて人がいっぱい来ているからうちにも」という考え方で図書館が作られることがある。（というよりそういう場合が多い）

そうすると、できあがった



講演会の様子

図書館は図書館に行っても何をしたらいいかわからない、図書館に来なくてもいい図書館になってしまい、かつ、作ることが目的なので運営などについて長期的な計画がなかったり、設備やサービスの更新がない。

都留文科大学で司書、司書教諭資格をとる学生にはいい刺激になったとともに、これから図書館の社会的な役割と計画・設計との関わりを考えさせてくれる、3 時間！だった。梅澤先生長時間の講演ありがとうございました。またこの講演会は図書館サークル「Libropass」の学生皆さんが企画・運営をしていただきました。ありがとうございました。

（情報センター
准教授 日向良和）

講師紹介



梅澤 貴典（うめざわ・たかのり）
昭和 49 年東京出身、平成 9 年青山学院大学卒業後、学校法人中央大学に勤務。平成 20 年東京大学大学院修士課程修了（修士（教育学））。現在学事部学事課副課長。平成 25 年度より都留文科大学非常勤講師。趣味は登山、海外バックパッカー。その傍ら世界中の図書館を見学している。

文大だより

台湾スタディーツアー報告



比較文化学科教授
山本芳美

比較文化学科では、日本の内外で1週間ほどの見学旅行（フィールドワーク、新カリではスタディーツアー）を毎年複数催しています。私は、沖縄・石垣島の開拓集落である明石にて、定点観測型の滞在を10年間継続してきました。今年はじめての試みとして、「ひまわり革命」を支えた国立台湾政治大学の学生たちや、台東・南王のプマ民族の交流を交えつつ台北、高雄、屏東、台東をめぐる「スタディーツアーⅡ」を組んでみました。テーマは「原住民族（先住民族）の観光化と文化への影響を考える」です。研究のため何度も訪れている台湾ですが、新たな発見がいくつもありました。

ことと若者の帰れる場所をつくり、原住民の力で自分たちの生活と文化の未来をつくろうという熱意を知り、私も応援したくなった。



台湾スタディーツアー報告

比較文化学科3年
今井郁也

今まで台湾について学んできたが、「実際に行ってみないとわからないこともある!」と思いスタディーツアーに参加した。8日間の台湾一周の旅はその期待以上の充実したもので、台湾への関心をさらに強くするものになった。



国立政治大学の学生たちと
ツアー参加者たち

日本では考えられないほど多くのバイクが行きかう光景に私は圧倒されながら、日本占領期の建物が残る台湾は昔からの文化を大切にすると感じました。国立台湾博物館ではタイヤル族の女性たちが作る独特な模様の織物を見た。そこには昔の文化を今の世界に生かし、文化の復興と経済活動の活発化を果

たそうという思いが込められていた。また、パイワン族の人々は女性でもできるトンボ玉づくりを仕事にすることで女性の出稼ぎを防ぎ、現代の家庭にトンボ玉を取り入れようと活動している。

同じく台北にある国立政治大学では、王雅萍先生の「台湾民族史」の講義を台湾の学生たちと受け、意見交換する機会があった。昨年4月の「ひまわり革命」に参加した学生たちが、台湾の原住民族や政治についてよく考えていることが伝わってきた。私たち日本人も日本社会の将来についてもっと考えていかななくてはならないと感じた。

台東では、原住民族自身が運営する数少ない滞在型体験施設である布農部落（ブヌン・ビレッジ）を訪れた。ブヌン・ビレッジでは、文化が衰退することを防ぎ、差別をなくすために、原住民の若者の自信を取り戻すことに力を注いでいた。集落を自然とリンクした観光地にする

ことと若者の帰れる場所をつくり、原住民の力で自分たちの生活と文化の未来をつくろうという熱意を知り、私も応援したくなった。

さらに、南王集落では大獵祭を見学した。プマ族の方々には私たちをあたたかく出迎えてくれて、おいしい食事をいただき、たくさんのお話を聞かせてくれた。長老から小さな子供まで民族をあげて大獵祭を盛り上げているのを見て、伝統を大切に継承していこうという情熱が伝わってきた。

このように普通の旅行ではできない経験ができて、このスタディーツアーに参加してとても良かった。まだまだ書き尽くせない他の経験も含め、このスタディーツアーで学んだことをこれからの勉強に生かしていきたい。



ブヌン・ビレッジ創始者
白光勝牧師からお話をうかがう

文大だより

卒業演奏会を終えて



卒業演奏会を終えて うぐいすホールにて

1月24日、初等教育学科音楽専攻4年生による卒業演奏会が行われた。4年生にとっては大学最後の舞台であり、演奏会を終えての達成感は計り知れない。音楽に関わってきた年数、経験は人それぞれ異なるが、この音楽専攻として過ごした中で得たものの大きさを感じるこの出来た貴重な日であったことであろう。私はその中で3つ学んだことがある。

まず1つ目は、肝心な場においては常に日々の積み重ねが土台にあるということだ。音楽は時間芸術だと言われ

ている。演奏会の曲と私たちは1年間を通して向き合ってきた。今までの音楽経験も合わせれば数分の演奏時間に10数年以上かけてきたことになる。大学では毎日のように音楽棟に通い、先生方のレッスンを受け、そこで新たな課題を見つけ次こそはと練習を重ねた。時には思うようにいかず曲に向き合えない日々を過ごした仲間もいるだろう。しかし、演奏を終えて感じたのはこの日の演奏はそうした時間も含めた日々の積み重ねがあったからこそ自信をもち、たった1人で自分の想う音楽を奏でることが出来たのだということだ。

2つ目は、音楽は緊張感の中でしか生まれないということだ。このことは音楽専攻の相守光恵先生が仰っていたものでもある。曲と向き合う時はもちろん、練習、ゲネプロ、リハーサル、舞台袖、そして舞台上、常に自分は1人である。演奏会の大曲を弾ききるためには、自分を取り巻くあらゆるものと離れて1人で曲に向き合うことが大切であることを強く感じた。練習においても本番を想定しながら演奏する時間を設け、集中する場面を多くとったことで本番まで緊張を高めていくことを自ら進んで行った。本番は緊張している自分を楽しむことにつながり、曲に対する願いや伝えたい想いを自分なりに表現できたと思っている。

3つ目は、仲間、後輩との関わりの重要さということだ。音楽専攻では、専攻をバケツとすると専攻生は芋ととらえ、この専攻に身を置く間「バケツの中の芋洗い」となってお互い磨き合うということがよく話される。その通り、レッスンで上手くいかなかったときに励まし合ったり、お互いの演奏の感想を言い合ったりと常に仲間は良きライバル、心の支えとなった。音楽棟のレッスン室から聞こえる仲間の音に刺激を受けながら自分を奮起させ、またその音が仲間に働きかけるといった環境が自分の音楽の糧になっていたのである。また、演奏会当日は私たち4年生の為に裏で多くの後輩達が伴奏者として出演するだけでなく、裏方の仕事を担い支えてくれた。私たちもそうであったが、そういった先輩方の姿を見、これから自分たちも頑張ろうという気持ちを抱くのだろうと思う。そういった関係が築かれるのもこの音楽専攻だからこそだと考える。

多くの周りの人たちに支えられ終えることのできた卒業演奏会。これから私たち4年生はそれぞれの道を歩いていくことになる。この卒業演奏会を通して、音楽専攻で学んできたことを振り返り、この後の活動に生かしていきたいと思う。

文大だより

卒業制作展を終えて

平成 27 年 2 月 4 日から 9 日まで、コミュニケーションホール 2 階で、初等教育学科図工・美術専攻の 4 回生による卒業制作展が開催された。今回の展覧会テーマは「Borderland」、日本語に直すと「夢うつつの境」となる。今年卒業する平面造形ゼミ生と立体造形ゼミ生の合わせて 12 名が創り出した実在する作品群と、それらが集まって織り成す幻想的な空間は、テーマの通りに夢と現実の境を連想させた事と思う。



同級生、先生方との記念写真（会場にて）

平面造形ゼミ生である私は、本展に平面作品 5 点、立体作品 1 点を出品した。この 1 年間、様々な作品制作に取り組んだ。他の学生も同じ状況だっただろう。授業や部活動、教育実習などの学生生活に加え、教員採用試験や就職活動、公務員試験などそれぞれの進路に関する活動、さらに卒業論文を作成しながらの作業であったため、作品作りにかかりきりという訳にはいかなかったものの、各々が満足できる作品を作る事が出来た。

作品づくりや論文執筆の中で、参考資料をあたると同時に自分自身ともまた向き合ってきた。

大学で知識を学ぶ上では楽しい事や嬉しい事ももちろんあったが、それと同じくらい、あるいはそれ以上に、苦悩や悲しみ、そして挫折があった。私達の作ったものには、多かれ少なかれ、これまで学んだ事や経験した事、感じ味わった事が反映されている。

その発表の場である卒業制作展は、私達の大学生活の集大成だ。作品制作から展覧会の企画や展示計画、パンフレットや看板の作成に至るまで、全て自分達の手による。また、先生方から頂いた助言によって、より良い形にする事が出来た。美術教室の学生が一体となり協力しながら作り上げた展覧会もまた、卒業作品の一つであると言えるかもしれない。

生憎の天候にも関わらず、本展は当初の予想を上回る数の来場者を迎え、週末に入る前にパンフレット等に増刷をかける事となった。回収したアンケートには、来場者が気に入った作品や、本展に対する感想などが記された。自分の作ったものに反響があるという事は、気恥ずかしい様な、嬉しい様な、何とも言えない照れくささがあった。

本展を終えて、私は今、ほっとしている。それと同時に物寂しくもある。祭りの後の静けさとも言うのだろうか、これまで長い時間をかけて心血を注いできたものが終わってしまった寂けさと、温かい夢の中から冷たい現実へ投げ出され呆然とした様な浮遊感がある。私達は、この大学生活で培ってきたものと、味わったもの、得られたものとを財産として抱えて生きていく事になる。そうしていつか、連綿と続く未来を歩いていく中で、壁に突き当たった時には、自分の分身の様な作品と、素晴らしい仲間とで作り上げたこの展覧会の事を思い出しては大学生活を懐かしむ事もあるだろう。アルバムに収めた写真の様に。

文大だより

白熱教室

杉原美智氏講演会

(平成27年1月23日)

平成27年1月23日、『一家族が語る素顔の杉原千畝』のテーマで再び杉原美智氏をお招きしました。杉原千畝(すぎはら・ちうね)は日本の官僚・外交官で第二次世界大戦中、リトアニアの領事館赴任時ナチスの迫害によりポーランドから逃れてきたユダヤ系難民に外務省の訓令に反し大量の通過ビザを発給しおよそ6千人を救ったことで知られています。会では美智氏の講演に加えて、DVD「ハブンと呼ばれて—ユダヤ難民と敦賀の港—」の鑑賞、そして山梨県中学校英語暗唱大会で見事優勝を果たした笠井葉月(かさい・はづき)さんの素晴らしいスピーチにより、会場は感動につつまれました。

講演会は非常に好評をはくし、又多くの励ましも頂きました。これからも都留市民はもとより県内外の人々

の都留市や都留文科大学に対するより一層の理解・認知を目指し、大学ならではのアカデミックな地域密着型に少しでもなればと感じました。このような活動もひとえに事務局長はじめ職員の方々、そして地元の人々の多大なる応援があればこそ、これまで支障なく実現でき、修了にあたり本当に感謝しております。ここ都留の地域活性化の為に、微力ながら皆様のご協力のもとにこれからも少しでもトリニティーがより良い機会になるようにと願っております。

トリニティー広報・財務担当 黒田隆子



集合写真

講師紹介



杉原 美智(すぎはら・みち)

杉原千畝氏の長男、弘樹氏の妻として杉原千畝氏の妻、杉原幸子氏の海外講演に数多く随行し、米国はもとより欧州、南米各地を訪れた。杉原千畝氏の素顔を知る数少ない一人である。

文大名画座『幸せの太鼓を響かせて～INCLUSION～』

2014年度の文大名画座が1月31日(土)13:30から2号館101教室において開催されました。今回は、知的障がいのあるプロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」のメンバーたちが家族や地域(長崎県雲仙市瑞穂町)とともに生活する姿を映し出したドキュメンタリー映画『幸せの太鼓を響かせて～INCLUSION～』を上映しました。会場には、小学生から年配の方々まで約160名が集い、首都圏から参加された方もいらっしゃいました。郡内地域の教育・福祉関係のみなさま(当時者を含む)にも多数ご参加いただきました。

映画上映に先立って、本学初等教育学科の障害児教育臨床ゼミの学生たちから「やりたいことを仕事にすること」に関して問題提起がなされ、それを受けながら、ゼミの指導教員である堤英俊講師の方から、映画のサブタイトルにある「INCLUSION(インクルージョン)」に関しての解説が行われました。その後、本編が上映されました。

参加者からは、「感動の一言です。彼らの生き様が、なんとも素晴らしく、たくましく、誠実で決して



名画座の当日の様子

ておごらず、感謝を忘れず前向きであることが、本当に私の心を打ちました。それは、和太鼓の、笛の音となって聞く人一人一人の心にちゃんと届いているのでは不思議です。本物のたくましい音なんでしょうね。生きていくことの楽しさ、意味を考えさせてくれた映画でした」「『理屈はいらない』とのことば通りで、奇跡のような映画というのが、最初の感想。これだけの生活、活動を支えていけるまちづくりがなされていることに驚嘆した」などの感想が寄せられました。

文大だより

地域貢献活動

2014年10月18日(土)、谷村第二小学校にて体験学習会「陶芸講座」が開催されました。私は、図工・美術教室の先生方、先輩方・同級生と共に指導者として参加しました。

小学校で開催される講座に参加するのは初めてだったので、事前講習の時からとても楽しみにしていました。

講座ではカップの制作をしました。体験の中で特に印象に残ったのは、参加されている保護者の方々、そして子どもたちとの楽しい会話を交えて、作品を作るお手伝いできたことです。途中、難しい行程がいくつかありましたが、子どもたちは諦めずに最後まで取り組み、最終的に思い思いの作品が出来上がりました。

今回のような誰かと一緒にものを作るという活動は、作品が出来上がっていく昂揚感から心がワクワクしてきて、自然に人と人とが繋がっていくことができるという、図工教育の豊かな可能性を感じました。

(初等教育学科 図工・美術教室2年 西野喜人)



制作風景

◆地域交流研究センターサテライト体験記◆

都留文科大学地域交流研究センターのサテライト(都留市まちづくり交流センター内)が設立されて約2年が経とうとしています。サテライトは地域の方々に大学をより身近に感じてもらい、さらに深く知って頂くことや大学と市民との交流促進を図ることを目的として設置されました。具体的には、学生ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣、地域でイベントを開催したい学生の相談など、大学と地域をつなぐ業務を幅広く行なっています。学生や市民の方々と対話をする機会も多く、素敵な活動をされている方々と多く出会えたことが印象的でした。



「みんなの広場」での
あまつかぜによるかるた大会

まちづくり交流センターでは「みんなの広場」と題して、暮らしに役立つミニ講座を定期的で開催しています。毎回、ボランティア講師による多彩な特技や趣味を活かした講座を開講しており、文大かるたサークル「あまつかぜ」にも講師として協力をしてもらいました。また、まちづくり交流センター内にあるファミリー・サポート・センターで児童文化研究部による影絵を開催するなど、学生との連携事業に積極的に取り組みました。



児童文化研究部が手遊びを教えてくださいました

サテライトでは地域の方々から寄せられる学生ボランティア募集の相談業務も行なっており、相談にいらした方からは、「学生の若い力でイベントを盛り上げたい」という声をよくいただきます。

大学と地域をつなぐ架け橋として、サテライトの存在は少しずつですが浸透しつつあるように感じます。今後さらにサテライトが活用され、活気あふれるまちづくり貢献できればと思います。

編集後記

広報委員長の
4年間

鳥原正敏

私は平成 23 年度から広報委員長を拝命し、4 年（2 期）が過ぎました。任期満了につき本年度で広報委員長を退任いたします。これまでお世話になった皆様、特に私を支えてくださった副委員長を始め委員会の先生方、事務局の方々に厚く御礼申し上げます。

広報委員長の仕事とは、主に学報の発行、大学案内の企画・立案、夏季・秋季オープンキャンパスなどのとりまとめを行うこと、即ちこれらの責任者ということです。その中でも学報の発行は都留文科大学の記録の一端を担うという意味において、極めて重要な仕事であると認識しています。

学報の編集は締め切りと、眼精疲労との戦いで、発行日の遅れ、校正漏れ、誤植が何より恐ろしい。また、予定通りに進んだ試しがなく、頂いた原稿を紙幅や編集方針の都合で刈り込まねばならないこともあります。我々広報委員は、オープンキャンパスなど様々な行事や大学案内の製作と並行して、こういった編集作業を年 3 回行わなければなりません。毎回、締め切り直前まで作業が続くため、発行されるたびに私は責任者として安堵すると同時に、誤植や校正漏れの不安に苛まれてきました。

広報委員の仕事は、想像以上に時間も労力も求められる力仕事で、更に委員長は全体のとりまとめの責任を問われる仕事です。率直なところ、委員長に就いた当初は学報などの編集は全て事務局に任せ、我々教員は教育や研究に集中すべきではないかと思うこともありました。しかし 4 年間で、この仕事は学内を知る上で貴重な経験であり、職責の重さから苦勞も多い反面、学ぶことも多かったと思っています。

広報委員長は教授会において専任教員の投票で選ばれます。次期広報委員長には坂田有紀子先生（初等教育学科）が選出されました。坂田新委員長と次期委員会のご活躍を祈念しつつ、私の編集後記を終わりたいと思います。

文末ながら、御愛読者の皆様に心より感謝申し上げます。また、今後とも引き続きご愛読いただけますようお願い申し上げます。



校正作業中の大学案内と学報

祝・都留文科大学創立60周年

この度、都留文科大学は短期大学時代から数えて平成 27 年度に創立 60 周年の記念すべき節目の年を迎えます。

それに伴い、様々な催しなどが予定されております。

☆記念式典・記念祝賀会・記念講演会・
記念コンサートの開催

☆『60 周年記念誌』の発行

☆国際交流会館（仮称）の建設 ……など

また、60 周年記念事業を充実したものとするため、募金・寄付金をお願いしています。国内外で活躍する同窓生の皆様、本学の活動を日頃より支えてくださる地域の皆様、そして今日までの発展に携わってきた皆様の温かい御支援をお待ちしております。

○詳しくは大学ホームページをご確認ください。



子ども読者とつくる
宮沢賢治童話の世界

牛山 恵 / 著
2014 年 12 月
富山房インターナショナル 2,700 円 + 税

◇うしやまめぐみ 国文学科教授

本
ぶんだい堂